

し、故に我沈痼實に此に至る。今、后無遮の悲濟を行ひ玉ふ、孔だ貴し、願くば、后我を憐むの意なきかと。后已むを得ずして瘡を吸ひ膿を吐き、頂より踵に至る皆遍し。后病人に語りて曰く、我汝か瘡を吮ひしとを人に語るとなかれと。時に病人大光明を放ちて告て曰く、后は阿闍佛の垢を去れり、又慎て人に語ることを勿れと。后驚て之を視る、妙相端嚴、光耀馥郁、忽然として見へず、后驚喜すること無量也。其地に就きて伽藍を構へ、阿闍寺と號すと、實に是れ現時、南都に遺跡を存する十八間、長屋即癩病院の始也。

吾人は此説話より、幾多の宗教的訓戒の潜めるものを見出す者也。聖武帝を助けて東大寺の大經營を爲す、必ずや此の如き自ら抑損すべき佛勅を感ずべきの時、后が空中の聲を聞く、豈意味なしとせむや。且夫れ慈善の事、單に人を利するが爲めに善なるにあらず、自ら行ふが爲めに善なるのみ、萬乗の尊と雖、自ら其手を下すにあらずむば、眞個の慈善の意義に協ふものにあらざる也。最後の癩病患者が來りて、後に求むる所の者實に是佛陀が皇后に對する偉大なる試にあらずや。而して后善く其請を容れて、己を捨て絶大なる慈悲を憐れ給ふ。嗚呼、后は是れ哀

々たる佛陀慈愛の權化にあらずや。后は是れ切々たる菩薩悲心の實現にあらずや。后の胸中大慈大悲の矜哀宿れるにあらずむば、何んぞ無縁の衆生を憐憐する此の如くならむや。殊に人に語る勿れと云ふに至りては、意義適切實に慈善は人に示す爲にあらざる也。蓋し奈良朝は宗教的經營及社會事業の發達、其極に達せるもの、是れ偉大なる信仰の靈火、内心に燃えたるの結果たらすむはあらざる也。

平安朝時代の經營

鎌倉時代は日本佛教の精華也。信仰の圓熟正さに其極に達すると共に、其理想を社會上に實現し來りて、實に昇平の天下を開闢せり。故に當代に在りては、昔て奈良朝時代に於て施設せられたる宗教的經營及社會事業は、再び光輝を放ち來りて、其生命を復活せり。看よ、聖武天皇が此の如く苦心經營の餘に成れる、東大寺大佛殿は、兵燹に罹れり、而して朝廷乃ち俊乘坊重源に命じて、大勸進たらしめ、源頼朝周防一國を以て造營料所に充て、遂に此大經營を再興したるにあらずや。而して重源が勸進の方法を見る、實に聖武帝の精神躍如として見づべきものあり。重源は法然聖人の弟子也。朝廷初め法然聖人に命じて勸進たらしめむとす、聖

人重源を推薦す、重源院宣を奉じて以爲らく、昔聖武帝斯役を擧ぐるや、王者の威福を以てして猶寄附を天下に募り給ふ、蓋し勝利を百姓に分ち玉はむが爲也、我豈聖旨を奉戴せずして可ならむやと、重源巧に考へ、一輪車を作り、大さ身を容るべく、左に詔書を掲げ、右に趣意書を貼り、各國に巡行して萬民を勸勵せり、世に傳ふ重源先づ京を辭して江州に入る、心に以爲らく、何人を以て先づ喜捨せしめむかと、路傍に乞丐あり、錢一文を他より乞ひ得たるを見、重源直ちに就きて之を喜捨せむとを求む、乞丐聽かずして曰く、我食するに物なし、乃ち他より乞ひ得たる物我爲れど之を他に與へむやと、重源重て請ふ、聽かず、乞丐遂に塵を拂ふて去る、重源之を追ふと數里、乞丐遂に其煩に堪へず、之を地に投じて去らむとす、重源乃ち恭しく之を拜し、袖を執りて睡りて曰く、汝生れて貧賤也、是過去に於て慳食なるが爲也、而して今世慳食なる亦此の如し、我強て汝に求むる所以の者、汝を以て東大寺大佛殿再建喜捨の最始たらしめ、以て汝が冥福を積ましめむと欲せし耳と、情濃かに言亦温かなり、乞丐深く感じて道に入れりといふ、豈意味深き説話にあらずや、宜なる哉、重源命を奉ずるや、直ちに伊勢の大廟に詣り、靈告を蒙りて、新

寫大般若經一部六百卷を轉讀して造營を祈る、誰か其森嚴なる態度に感謝せざるものあらむや。

既に此の如く聖武天皇の事業を再興するものあり、豈亦光明皇后の芳跡を追ふものなからむや、果して忍性上人あり、上人亦南都より鹿島神宮に詣り、三日參籠、法華經を讀誦して戒律の再興を祈る、屢大般若を書寫し、文珠の像を作る、初め南都に在りて同學に語りて曰く、東國未だ人あらず、我往きて度せむかなと、遂に鎌倉極樂寺に住し、此所に於て百般の慈善事業を起す、殊に癩病患者を收容し、藥湯を作りて之を治す、其施設經營歴々として今猶徴すべき物あり、江島は實に當時の離隔所たりしといふ、其馬病院の如き洵に注意の周到なる、殆むと人の意表に出づ、是畢竟律師か慈愛の溢るゝ所、自ら到る所人をして其德澤に浴せしめし者にあらずや、殊に南都に在りては王畿附近に於ける癩病人萬餘を集め食を施し、光明皇后の十八間長屋を再興して藥湯を作り、之を治療し、曉に自ら癩病人を負ひて市中に置き、夕へに之を負ひて舊舎に歸る、風雨寒暑と雖決して缺かすといふ、豈是生ける佛陀に非ずや、頭を回らせば年所既に七百年、十八間長屋の遺跡

は空しく残りて、黒風白雨當年の芳躅を追慕せしむ。今や廿世紀の新氣運は社會事業、慈善事業に向て多大の力を要するの時機、西洋各國に於て基督教徒は癩病患者の救済に向て大に力を致せり。而して我國に於ける四個の癩病院は皆彼教徒の手に成りて、佛教徒の未だ起て此等の事業に着手するものなし。豈遺憾ならずや。殊に忍性上人は四天王寺に詣し、聖德太子の鴻業を追慕し、處々に療病悲田の兩院を構ふ。其桑谷療病所は二十歳間に於て痊癒る者四萬六千八百人、死する者一萬四百五十人たりしといふ。當時の時代にして此の如き大事業を成功する所以のもの、實に信念の横溢せる結果たらずむばあらざる也。

嗚呼前にしては聖武天皇、光明皇后あり。後にしては重源、大德、忍性、律師あり。是大聖釋尊の清淨なる源泉を汲みて、枯渴の萬靈を救済し、理想の國土を實現し玉ふ。信仰的偉力は煥として千古夫れ明らかなり。苟も佛教徒たるもの感激する所なくして可ならむや。聊か宗教的經營及び社會事業の精神を論ずること此の如し。

一八 求道會館設立の趣旨を披瀝す

吾人自ら揣らず、茲に求道會館設立の趣旨を披瀝して、世上同愛諸士の贊助を仰ぐ所あらむとす。抑々吾人の此微意を懷抱する一日の事にあらず。而して屢々之を世上に公表せむと欲せしこと、亦一再に止らず。然れども其事業の神聖なるを感じ、自己の修養の不足なるを顧るに至りて、毎に慚愧として口を噤し、筆を投するに至りぬ。況んや信念の源泉より涌出する淨財の喜捨を請ふに至りては、滴々皆是れ、佛陀白毫の恩賜たらざるはなし。豈普通の經營建設の念を以て起つべけむや。故に吾人既に業に先登及親友の贊助を被りて、慙慙到らざるなく、又各地同愛の諸士に對して、吾人が胸臆を披き、滿腔の同情を被れるにも拘はらず、遂に之か發表を遅くするに至りぬ。然るに實際上の需要は日一日切迫し來りて、今や吾人修養の不足なるの故を以て之を緩ふすべきの時にあらず。況んや固と是れ自ら道を求め且つ道を求むるの人と其樂を同ふせむとする者、至誠佛天に誓て之か經營に盡瘁する亦是れ道を求むるの一手段たるに於てをや。此に於てを

や吾人斷々乎として年來胸中に懷抱する所を披瀝して、謹て江湖幾多同憂諸氏の贊助を請ふ所あらむとす。

回顧せば去る明治三十三年東京本郷區森川町に一家屋を得たり。地高燥にして氣清く、構造亦寄宿舎に充つるに適す。且つ是帝國大學及び高等學校の中央に位して四方學生の輻輳する所たり。清澤滿之師親しく之を統督して、學生數名と共に同居し、常に寢食を同じくし、日夜心靈の修養を事とせらる。師は實に言はずして行ひ、心を以て人を帥る。古の所謂諄々人を誨へて倦まざりし人也。學生數名常に外より來りて師の教を受く。師乃ち此等の道を求むるの人に對して日曜毎に親しく講話を授く。當初僅かに數名に過ぎざりしが漸次翕然として集り來り時として室に溢るゝに至れり。名つけて精神講話と云ふ。蓋し東都教界中に於て新光明を發揮したる者實に師の賜也。予昨年三月歸朝したるの際、清澤師は親しく予に其跡を譲りて寄宿舎を經營し、講話を繼續せしめらる。實に是れ求道學舎及び日曜講話の起源也。爾來既に一年有餘、時勢の要求は益々求道の士を驅りて門前踵を接せしむ。而して師や既に空しく靈界の人となり玉ひぬ。今や滿天の秋氣、

先生曾住の室にありて筆を取る、實に追憶懷愴の感なくむはあらざる也。

抑々求道學舎の目は之を無量壽經の文句に基く所也。曰く爾時世自在王佛其高明志願の深廣なるを知らしめして、即ち法藏比丘の爲めに經を説きて言はく、譬へは大海を一人升量せんに、劫數を經歷して、尙底を窮めて、其妙寶を得べきが如し。人至心にして、精進にして、道を求めて止まざるあらば、會當さに尅果すべし。何れの願をか得ざらむと。蓋し求道の目は佛經到る處に存すと雖、特に此文を一瞥したりし時に、吾人は佛陀無限の救濟力の吾人の頭上に下れるを感じたりき。嗚呼佛陀は此の如き堪忍不拔の大精神を以て遂に理想の清淨國を出現し玉へり。安靜の樂土を莊嚴し玉へり。實に是れ吾人永久の安所にして、光明の世界なり。冀くは吾人は此光明に攝取せられて、此理想の像を吾人社會の生活の上に實現せむと欲する實に吾人の至願也。

人言ふは安くして行ふは難し。殊に人生生活の上に理想を實現する最も至難とする所也。今や社會的問題は將來の一大難關として解決を促し來る所。吾人冀くは内心の安慰を以て平和の根柢となし、信仰の威力を以て幾多の艱難に打勝

ちて僅かに佛陀冥眈の下に肅々として自ら謹み、且つ同好の學生諸氏と共に生活を同くし、修養に勉むることを得ば吾人の志幾分か酬ひたりと謂ふべきか。是學舎を名くるに求道を以てする所以。唯文字の如く眞摯に道を求め、佛陀救済の靈光に沐浴して生活を營むを得は實に吾人無上の幸福也。是吾人か特に求道の切實なる人々を寄宿せしめて生活を共にせむと欲するの微志也。

特に近時最も學生青年の間に於て其風潮を高め來りたるは内心に於ける安心修養の問題なりとす。吾人は胸中煩悶を抱ける同胞に對して實に全身の同情を寄するもの也。蓋し煩悶なるものは煩悶せむと欲して煩悶するものにあらず。又之を遣らむと欲して遣り得べきものにもあらず。之を治する唯獨り佛陀慈愛の救済力あるのみ。佛陀靈光の攝取あるのみ。吾人は彼の滿腔の悲哀鬱々として解けず悶々として苦しみ、天を仰ぎて嘆き、頭を垂れて涙潸然たるものあるに至りては、吾人實に之を凝視するに忍びざる也。吾人は白狀す。吾人は實に煩悶の苦を嘗めたる也。沈鬱の實驗を経たるもの也。若し不幸にして吾人佛陀慈愛の光明に接觸することなかりせば、吾人亦其運命の如何なりしかを知る能はず。吾人昔

日の境遇を回顧し來りて自ら悚然として心を寒からしむるものあり。幸に佛陀慈愛の救済力在せり。竊くは世の苦める者共に手を携へて其清懷に眠らむ哉。吾人現時固より煩悶なきにあらず。苦惱起らざるにあらず。唯其起るや煙霞の曉天に横ふが如し。雲霧の月明を遮るが如し。幸に無限の慈光は迷蒙を破りて清淨の天地を開闢し來る。吾人敢て獨り斯道を私するに忍びむや。唯其實験を披瀝して心琴の共鳴に訴へ所感を傾けて内心の懺悔を事とせむと欲するのみ。此に於て日曜講話を開きて清閑半日來會求道の諸氏と共に甘露の法雨に浴し、内心煩悶の烟を消滅して共に光風霽月の天地に遊ばむことを樂む實に是れ人世の最大幸福にあらずや。多生の大事因縁にあらずや。經に曰く。壽命甚だ得難く、佛世亦値ふこと難し。人信慧あること難し。若し聞かば精進にして求めよ。法を聞きて能く忘れず。見て敬ひ得て大に慶ばし。則ち我善き親しき友也。是故に當さに意を發すべし。設ひ世界に滿てらん火をも必ず過ぎて要めて法を聞かば會ず當さに佛の道を成し、廣く生死の流を渡るべし。と。豈是求道者の句々味ふべき訓戒にあらずや。

吾人は實に此の如きの意味を以て求道學舎を設立せり。吾人は此の如きの精神を以て日曜講話を開き、日曜講話は本年夏期傳道の間を除くの外は、昨年已來一日も廢したることなし。特に毎月第四の日曜日には講話後に於て信仰談話會を開き、來會者圍繞して膝を交へて、各其所信を披き、靈感を語りて共に相互の修養に供す。吾人は現時如何に青年が内心修養の問題に向て心血を注ぎつゝあるかに感ずるもの也。開會已來眞學道を求むるの人々は常に室に満ちて、所謂立錫の餘地なきに至る。抑々講話を開くの室は平常吾人の住居するの居間二室を以て之に充つ、爲めに狹隘を訴ふる固より其所なりと雖、常に障を撤し、椽に溢れ、坐するに所なく、甚しきは襖を隔て、聞き庭に佇立せざるに至る。近時遂に止むを得ず、壁を壊ちて猶他の一室と連絡せしめ、以て一時の急を救はむとす。然れども是亦僅かに其需要の一部を充たすのみにして、大體に於て現代切實なる求道の人々をして満足せしむる能はざる明らかな也。殊に冬季の如きに至りては、亦如何とも爲すべからず、吾人洵に以て憾と爲す。是止むなく吾人自ら揣らず、求道會館の設立を發起して、先輩親友諸氏の指導を仰ぎ、以て江湖同愛諸氏の贊助を

求むる所以也。

現時求道者の熱心なる決して日曜講話のみに止らざる也。個人として來訪して其所信を披瀝する人あり、年來解けざる疑を質す人あり、境遇より醸成せる苦悶を訴ふる人あり、又團體として夜會を催ふして相互の修養に供するあり、書信を以て其信仰を表白する人あり、最も眞面目に至りては公に懺悔して胸中の清楚人をして欣慕措く能はざらしむるものあり、他くまで胸臆を暴露して熱情人をして感激止むべからざるものあり。吾人は實に現代思想界の潮流決して偶然ならざるを知る。吾人は思考す、吾人の社會は猶深く人生を實驗すべき運命を有せり。吾人國民は非常なる艱難に打勝つべき時運に膺れり。將來社會の激浪益々高くして益々内心的光明の發揮を要し、慘憺たる風雨愈々烈しくして愈々精神的威力の鍛練を要す。噫世の苦悶者に安慰を與へ、求道者に救済の光明を與ふるを要する。蓋し今後益々急を訴へ來らむのみ、此に先づ求道會館を設立して、此般の精神的需要に應ずるの施設を開くの端緒たらしめむと欲する也。

從○來○帝○國○の○首○都○に○於○て○佛○教○徒○に○屬○す○る○會○館○の○設○あ○る○こ○と○な○く○爲○め○に○其○不○便

を感ずること一日の事にあらず回顧せば大日本佛教青年會の組織せられたるや實に今より十二年前の事に屬す吾人當時學生間に於ける會盟を回想する毎に一種森嚴の靈氣を感せずむはあらざる也而して帝都の中央に於て會堂を建設して以て清新なる氣運の中樞に充てむと欲せしこと實に其宿望たりき而して其計畫屢々進みて而して未だ實行の緒に就かず事頗る遺憾に屬す然れども畢竟是其規模の大にして且つ佛教各派の統一を要せるが爲めのみ蓋し他日大成の時機を期して可也吾人去る明治三十三年歐米に航して親しく泰西の宗教界を觀察し特に近時社會的經營につきて調査する所あり彼の基督教青年會の如は年來最も之を調査せむと欲せし所シカゴ紐育を初めとして米國諸市到る所之を視察し特に倫敦ストランドの中央本部に至りて十分に之を視察せり其會堂を初めとして教育體育社會宗教の各方面に涉りて其施設の整頓せるを調査して此等の事業の我國佛教徒の手に成ることを望む實に切也而して吾人が最も感したるは單に非常なる設備を完成し年々數千萬圓の寄附金を費して其事業を擴張するの點にあらずして寧ろ其創立の當時微小なる源泉より流れ來

りて遂に此大なる効果を收めたるの點にありとす見よ一千八百四十四年創立の際してや僅かに十二人の青年相會したるなりき其五十年紀念祭を倫敦ロイヤルアルベルト館に行ひ萬國全會の名を以て滿堂の青年歡呼の間に半身像を創立者ジョージ・ジョーンズ・ホムに贈るや彼は殆むと涙を以て満たされつゝ起つて謝して曰く予は毫も此の如き賜を受くるの價値なし予は全く了解する能はず予の事を創むるや何を今日の盛大なるを期せむや唯志を同ふするもの一小室に會合し一週僅かに二シムラング六ペンスを拂ひしに過ぎざりしのみ而して發達せし此の如し予は徹頭徹尾神祕にして測る可からざる也と蓋し是れ精神的事業の好模範也倫敦中央本部エキセターホールを訪ひたるの時氏は實に饒饒として猶全國委員會の職長として事務を取り吾人を見て手を探りて迎へ我事業を懇懇して措かざりき吾人感慨無量實に言ふ所を知らざりき

歸朝已後心を潜めて修養の問題に着手し心靈の開拓に心を専注せしが遂に會館の必要は日一日に切迫し來れり而して是實に佛教者全體に於て各種の方面に於て要求を形ふる所茲に吾人先づ現時の必需に應ずべき程度の會館を設

立して佛教全體の需要に供し、且つ集會場を設けて清新なる社交の中心に充てむと欲する所也。特に現時求道學會の附近に於て多少の敷地を借り得べき好機あり、而して先輩及親友諸氏の懇切なる指導と贊助とを與へらるゝあり、吾人不肯固より此の如き神聖なる事業を發起するの器にあらざるも求道上、及び社會上の要求實に厭過すべからざる者あり、其規模の如き決して其大なるを期せず、其建築の如き亦高壯を望まず、單に切實なる求道者の焦點となり、且つ佛教者一般需要の急に應ずるを得ば幸之に過ぎむのみ、若し之を以て燎原の一點火となし、此般の事業佛教界に興起し、遂に他日全國佛教青年の中心を東都の中央に實現するを得ば、多年の宿志初めて報ずるものと謂ふべし、而して吾人將來必ず此時期の來らむことを確信して、毫も疑はざる者也、冀くは佛天の冥祐、吾人の至情を照鑑して、前途の光明に導き、玉ひ、全國同感同愛の諸士不肖か、愚衷を憐みて、協力贊助し、玉はむことを謹て白す。

信仰問題

終

附

録

挿繪の解

獨逸ウツテンベルヒ宗教改革の遺跡

- (一) シュロス、キルン (Schloss Kirche) の圖
ルーターが宗教改革の嚆矢として九十五箇條を掲げたる寺。
- (二) 同寺入口扉の圖
破製にしてルーターの羅句文九十五箇條を寫出し、千古當年の絶叫を想はしむ。
- (三) ルーター樹 (Luther-Buche) の圖
ルーターが大學生歡呼の間に羅馬法王の破門狀を焼き棄てたる場所、今や柏樹
老蒼旅行人の節を留めしむ。
- (四) ルーター住宅の圖
ルーターがワルトブルヒより歸りて後、一家團聚自ら耕し、自ら織り、信仰的生涯
を送りたる住宅。
- (五) ルーター居間の圖
住宅の一室にしてルーターがメラントニ、ブーゲンハーゲン、ヨース等の諸
友人と共に聖書翻譯校合を爲したる處、古机燬燼何れも當年の物也。



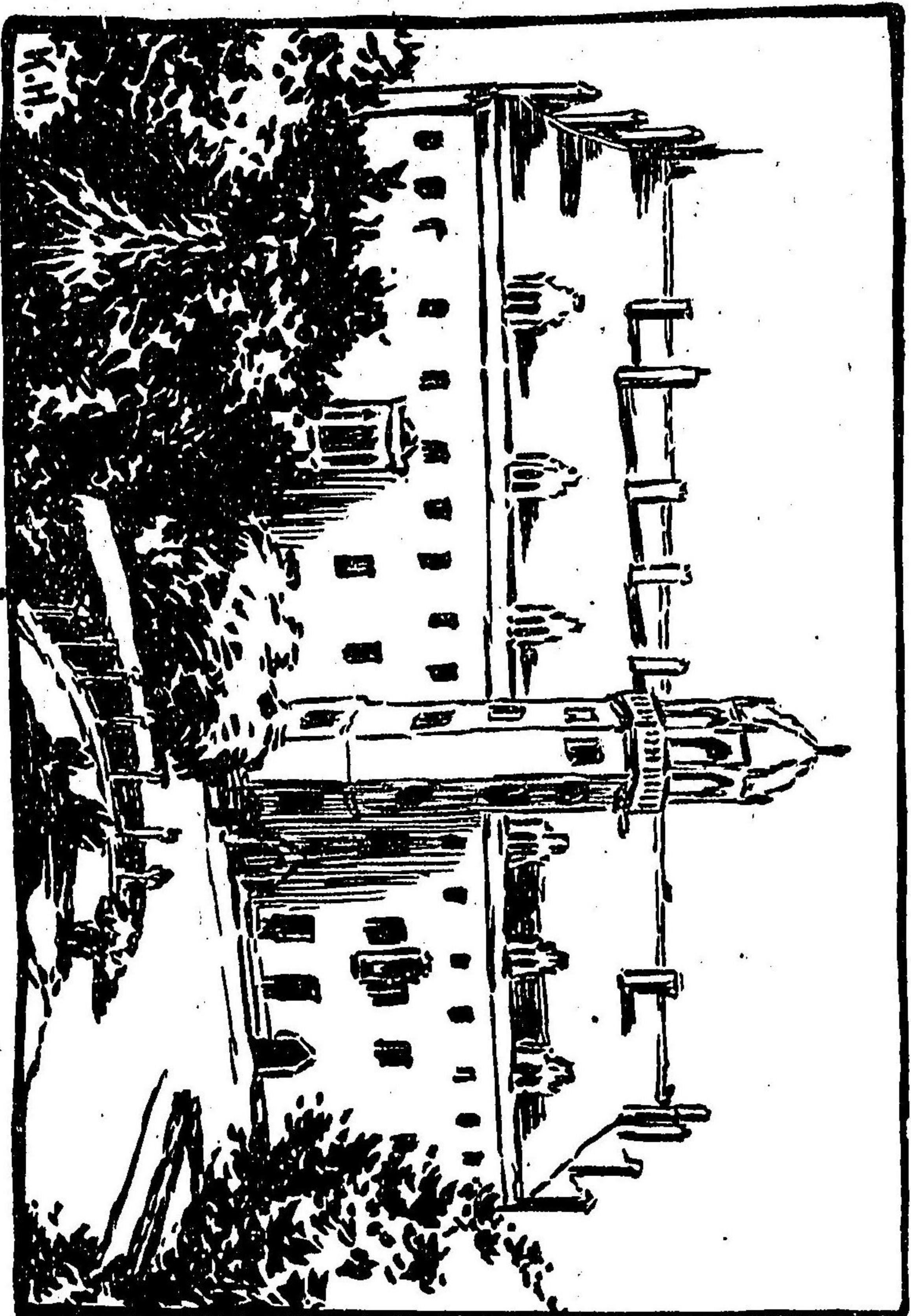
(一)



(二)

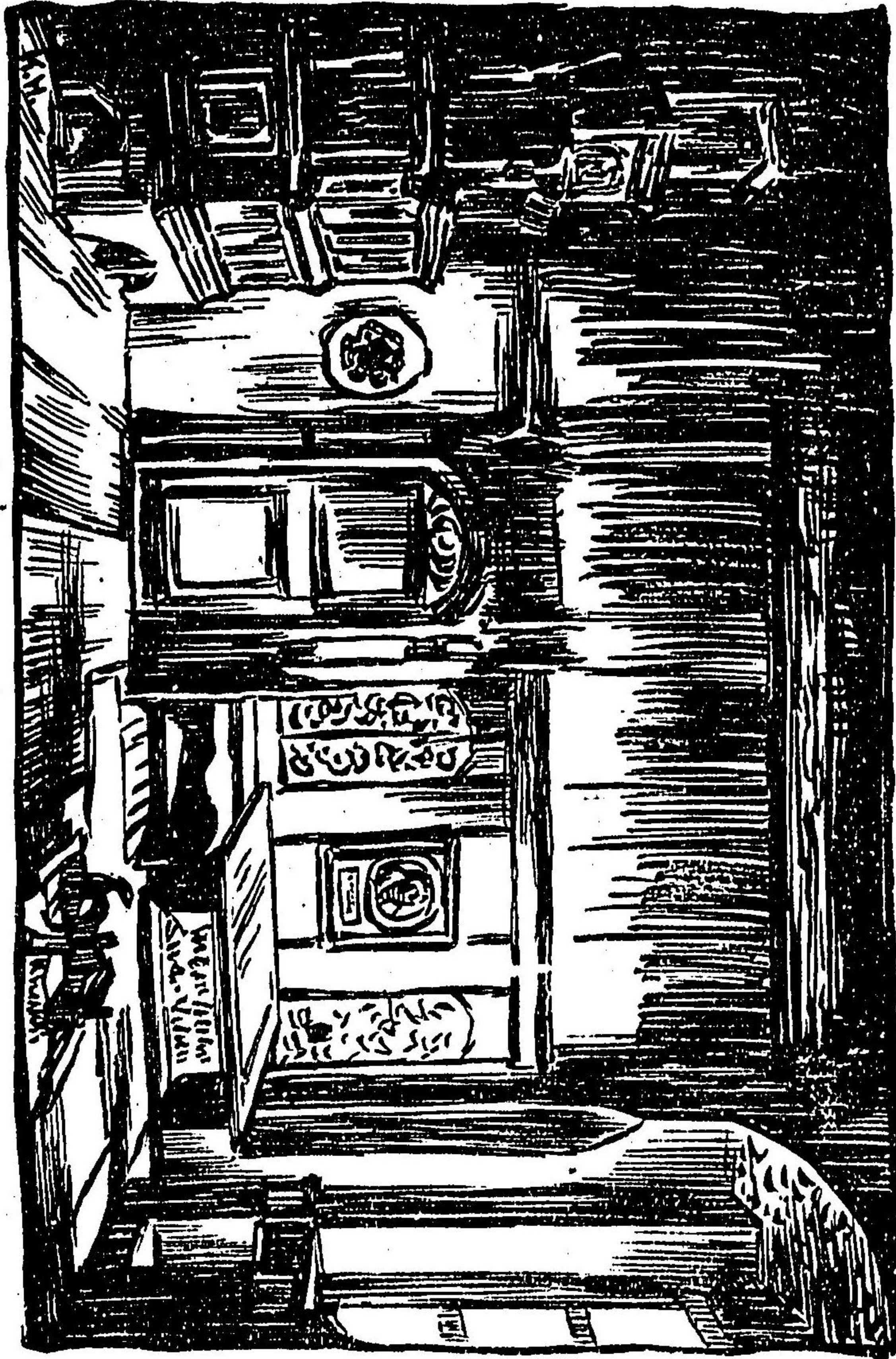


(E)



(四)





(五)



横濱にて阿兄に別るゝ時

いざゝらは別をつげむもろとも

頼むいのちよまさきくであれ。

一 眼水にあちたり我が涙

君と別れてこぎかへる時。

八百よろず神もみてませこのまゝに

朽ちはてむものか我が身君が身。

常

音

西教事情

緒言

我が畏敬親愛する師友、辱知同愛諸君貴下。

諸君の温かなる同情を荷ひ、滿身感謝の念に堪へずして最愛の母國を辭してより、既に十月、烏兔^{ウツ}匆々として年序亦云に更まる。而して一別已來萬里渺茫として久しく音信を絶す、洵に謝するに言なし。是は南船北馬旅情匆忙たりしによると雖、又他に大に其故なくむばあらず。抑も予が日本を辭するの時、約すらく、必ず時々通信を發し、到る處其視察の結果を報道すべしと、當時心私かに期するに身萬里の外にあるも、通信頻繁にして殆ど膝を交へて諸君と晤るが如くせむことを以てせり。乃ち太平洋上船中に於て、同僚池山榮吉君と相謀り第一回通信を草し、上陸後將に之を郵函に投せむとせり。而して翻て兩人情々考ふるに、此の如きは所謂皮相の觀察なる者、たとへ積て千萬篇となすも何の効かあらむと。乃ち斷乎として之を焚き、爾來銳意専心、犀利なる觀察をなし、西教の真相を洞察する事

に勉めたり。視察漸く熟するに及び、羅に大に感心したりしものにして、左程感心を假せざる者あり。前に注意せざりし事にして頗る注意を要する事あり。見聞益々廣くして片言の斷ずべからざるを知り、洞察漸く深くして其淵源する所遠きを知る。當初は左程の意味なき者に興味を有し、四圍の境遇の異なるを顧みずして、漫に風俗制度を褒貶し、中頃に至りて初めて精密なる調査に着手せんとするや、遂に茫として其津涯を知らず、恰も牛を曠野に放つゝの感あり。特に宗教事情は先づ何の處より調査を初むべきやに苦しむ。教會を訪ふ、音樂起り、牧師説き、信者拜す。政府者を訪ふ、法令知る可く、統計徴すべし。諸種の營造物を訪ふ、建築高壯なり、設備完美せり。而して未だ手は知らむと欲する所に達せざるなり。或は名士學者を訪ひ、或は新聞雜誌を蒐集し、新古の出版物を涉獵し、髣髴として僅かに其大勢を方物するを得べし。而して一旦其端緒を得るや、却て材料の豊富なるが爲め散漫として收束する所なきに苦しむ。時に事實の撞着せるあり、全く意見の衝突せるあり。況んや、英、米、佛、獨、澳、匈、到る處全く國家の組織社會の情況を異にせると、殆むと豫想の外に出て、單に耶蘇教と云へば人は直に新舊二派を想起するも、せ

シユヰット、カピタン等のオルデンより、スカーテンホルク、クエーカールの集會所に至るまで、大に其趣を異にするものあるに於てをや、而して一首都に止りて漸く其端緒を得、其地に熟するに及び忽にして去て他の未知の地に轉ず。實に短日月にして到る處、社會内部の宗教事情を探らむとす、困難はより甚しきはなし、嗚呼回顧すれば、日本出立已來精神暫くも休まず、常に心を驅りて歲月と先を争はしむ。異域の風物時に耳目を慰むるものなきにあらざるも、遂に予等の心を牽くに足る者なし。各國到る處終日營々宗教組織の實況を視察し、其社會的勢力を有するの偶然ならざるを察し、滿腔の感慨を抱きて歸り、旅窓燈下遙かに日本宗教界の將來を懷ひ、筆を驅りて所感を寫さむとせしと幾回なるかを知らず、然れども猶考察の未熟を慮りて僅かに二三の短信を知人に致して、聊か其所在を報ずるとに止めたり、而して故國の知人纏れる通信を促す頗る切なるものあり、之に接する毎に未だ嘗て胸を刺し心を貫くの感なくむばあらず、是今日に至る迄の實情を白狀する者、冀くは諸君幸に怠慢の罪を恕するあらば最幸とする所也。

夫れ泰西宗教の事情なるもの、其關聯する處頗る廣潤なり、各教派の信仰狀態、

内部の組織、傳道の施設、經濟の運用、國家上の關係、政治上の位置、慈善事業の施設、教育上の成績、社會問題に對する態度、學術界に於ける趨勢等、殆ど社會百般の事、宗教に關せざるなく、社會的圖書を繕くに當りて、必ずや宗教上の關係に付て云々せざるは稀なり、恐くは十年之が視察を委ぬるも猶十分也と爲すに足らざるべし、況んや僅々十ヶ月の短日月に於てをや、然れども此間に於ては予輩が出來得べき最上を盡し、最も適切なる順序を踏み、今や正に其第一期の視察を終りたる者、其蒐輯する材料、視察せし結果、着々として歸趣を一にし、其根底悉く宗教の教理と歴史と各國の民情、及び社會的組織に淵源する所あるを確信を有するに至る。今にして西教事情に關して、少しく言を立つるも恐くは正鵠を誤らざる可きを信ず。且つ故國の師友通信を促すこと益々急也、乃筆を探りて西教事情を草せむとす。然れども各種の題下に概括的敘述を取りて、日記的記載の繁を避けむと欲するが故に、先づ此書を裁して一は以て緒言に代へ、一は以て旅行道程を縮寫して別後消息の大體を致す所也。

昨年(三十三年)四月十三日正午横濱を解纜し、二十五日晚香坡に着し、卅日早朝シカゴ市に着せり。太平洋の鯨波、落機山の積雪、茫々たる曠原等、天然の大觀を送り、迎し來りて、順に二十層の家屋櫛比せる街頭に立つ、其間の變化最も著し、池山君と視察を肇む。シカゴ市は過去數十年間商業旺盛の結果、人口を増殖し、貧富の懸隔、智識道德の高下、人種の異同最も著しく、爲めに社會事業正さに發達し、其活氣頗る見るべきものあり。一週間滞在、審かに視察す、テラー氏のシカゴコンモンス、アダム嬢のハルハウス基督教青年會等、其主要なるもの、同青年會は現書記長ウルバー、メツサー氏が十年一日の如く盡瘁せられし結果によりて、最も完全なる本部會堂を有す。欽羨忘る能はず。去りて紐育市に着す。世界中倫敦に亞ぐの大市場、社會事業亦勃興せり。而して青年會として北米合衆國及加奈陀の中心たり。審に視察す、特に記述す可し。又萬國傳道會社の如き、之を訪問して、皆報告を得たり。

紐育を中心として南北二回の旅行をなす。南の方華盛頓府に獨立の偉業を追想し、大統領に面謁の榮を得。バルチモアに舊教及メソヂスト等を視察し、フ

ラデルフ、非ヤにクエーカー其他の新教を視察し、北の方ポストンにユニテリアン、バプチスト等諸宗派の信念を審察し、各地の民情と歴史とによりて其狀態を異にするものあるを知り得たり。特に同地にては南條師の紹介にて、ハーバート大學の梵學教授ランマン氏を訪ひ、又トリー教授を訪問せり。又同地に滯留せらるゝ松本文教君と同道して、杉村君の紹介せる佛教信者ウエード氏を訪へり。性眞、擘一見舊知の如し、要するに、同地はビュリタンの上陸せし處、米國中最古風にして信仰最も熾なり。宛として一個の小英國、予は特に同地に於て佛教信念の萌芽を含みつゝあるを認知するを得たり。

米國宗教制度に關しては、エバンストンの北西大學總長ロージャ博士、バルチモアのジョンスホプキン大學のアダム教授等に就て指揮を得たり。前者は有名なる米國法律學者にして、米國憲法上の解釋を示され、後者は有名なる米國歴史家にして、各州に於ける宗教の位置を示されたり。又嘗て日本大學教授たりしチンソンの紹介にて、ニューヨーク法律圖書館に入り、又嘗て岩倉右府と共に歐洲を漫遊せしバルソン氏の案内にて、華盛頓圖書館に入り、米國各州宗教法人條例、及米

國宗教歴史等有益なる圖書を得て、彼茫乎たる米國宗教制度上に於て適當なる取調を得たる極めて幸とする所也。

監獄及感化院の取調に關しては、日本出立已來同道を得萬事につき非常の便益を與へられたる、監獄事務官小河滋次郎氏の適切なる指導と援助を得たるは最も感謝する所也。同氏と共にデトロイト、ニューヨーク、フネラデルフネヤ等の監獄、グリーンウッド、ロチエスタ、等の感化院、ニューヨークアシラム、フネラデルフネヤのキラルドコロイチ等を縦覽し、米國感化事業の大勢を知る事を得たり。已上米大陸の視察は同僚池山君と共に爲せし所、且相謀りて曰、前途歐洲視察すべき國多くして日洵に少し、所謂日暮て道遠き者、請ふ互に分擔して事に従はむと、乃ち同君は直に獨逸に行き伯林大學に入りて學理的研究に着手し、予は先づ英國を視察し、夏佛國に相會する事を約す。乃ち同君は五月十八日を以て獨逸ブレーメンに向ひ、予は同二十三日を以て米國を辭して英國リバプールに向ふ。

英 國

五月卅一日正午倫敦に着し、予か舊友吉田靜致君と同宿す。英國に於て最予を

驚かしたるは居然として城の如き英國教會の制度是なり。乃ち米國に於ける旅行風を一變して、淹留凡二ヶ月一所に止りて審かに之か組織を調査し、或は圖書、或は報告、或は新聞雜誌等を集め之を研究せり。且同地は百般の教派皆備る。メソヂストあり、バプチストあり、コングレグーションあり、蘇國國教たる長老教會あれば、羅馬舊教のカーチナルポークワンは頑として地歩を占め、クニーカーは其集會所に默禱し、スウヰーデンボルク教師は猶其神祕を説き、千宗萬派雜然として交る。予は一々其教會を訪ひ、出來る限り、其性質組織を研究せり。實に宗教研究としては尤も興味津津とし盡きざるの地、且つ社會事業なる者は多くは淵源を同地に發す。監獄の改良も同國より起り、青年會の設立も同地より起り、救世軍の本城も同都より來る。加ふるに、宗教的問題は常に火花を散らして戰へるあり。ハリファックス伯は英國教會に於て古來習慣の燒香等の儀式を保存すべきを主張し、オックスフォードのハイチャーチ運動は隱然として今に其勢力を逞くし、新教各派は聯合して、ノッチンガム丘に數萬の僧俗一週間、基督教徒獎勵會を開けば、舊教徒は愛蘭に勢力を有して政治界教育界の全權を握らむとし、病院

日曜には倫敦市長依頼して各教會に寄捨金を集め、印度飢饉に關して亦義捐を叫び、カンタベリー大僧正の演説は南亞の戦争に、及北京重圍の慘報は忽ちにしてセントポール堂裏祈禱の聲を揚げしむ、スタントンコイトは倫理運動を主張し、ハイトパークの一角には人文的一神説を演説せるあり、又國教攻撃を目的とせる會あるに至る。而して英國監督教は苟もアングロサクソン勢力のあらむ限は、千古儼乎として變ずるなかるべし。實に同地に於ける宗教及社會は幾多の年月を費して之を研究するも亦其少きを感じざるなるべし。同地滞在中、北の方ヨク、及南の方カンタベリーに遊び其伽藍を訪ふ、是英國監督教の二大中心なり。高壯輪奐巍然として半空夕陽の間に聳ゆる光景、宛として中世の昔目を想見せしむるものあり。

倫敦附近學區多し、イトン、及ハローの中學を訪ふ。前者は平原に在てタイムスの上流に臨み、後者は小丘にして一望野を望べし。幽清俗寰と絶つ。又ケンブリッジオクスフォードの大學を訪ふ。コレイヂ軒を並べ建築何れも中世のモナステリーを保存したる者、古色蒼然掬すべき者あり。特にオックスフォードにマ

クスミュラー博士を訪ふ。これ七月六日なり。博士白髮顔童一見欽慕の情に堪へざらしむ。審かに南條師及高楠氏の消息を聞き頗る満足の色あり。予か爲めに最も有益なる教訓を賜ひ、且つ伯林に行かば必ずハルナツク博士の講義を聞く可しとの助言を與へらる。博士時に舌癌を病む。前日タンブリッチ、ツエルより歸り書を寄せて予を招かれしなり。會談一時間、懇に日本佛教に新鮮なる光明を與ふべきことを誨へらる。將さに辭して去らむとするや、懼爾として顧みて曰、予を以て幾歳とか爲す、予は正さに七十七歳也。而して嬰鑠たる此の如し。卿等亦老て勉る予か如く爲すべしと、辭して家門を出づ。綠牆に攀ぢ盡亦靜なり。二十餘年前南條師が出入し、十年已前高楠氏が出入し、故笠原師か病を得て辭するの夜、躊躇低回去る能はざりしの處、追懷措く能はざるものあり。爾後四ヶ月、予か獨逸伯林に到着したるの時、即十月下旬マクスミュラー博士の訃に接す。嗚呼。

七月二十五日、吉田君と共にドーバーより海峽を横り、佛國カレールに向ふ。

佛 國

予の佛國行を急ぎし所以は、巴里に於ける佛國聯合公私救恤慈善會議と、萬國

聯合宗教歴史大會に出席せむが爲なり。前者は七月三十日已後一週間に於て、後者は九月三日已後一週間なり。聊か其概況を記せむ。

公私救恤慈善會議は、七月二十九日午後ソルボン大學大講堂に於て發會式を舉行せり。蓋し今回博覽會を機會として開かれたる幾多の萬國聯合會議中最も主要なるものの一にして、特に歐洲に於て社會問題は益々勃興して其勢熾ならむとするの今日にありては、此種の會合は最も人氣を牽くものなるべし。當日は佛國大統領エミル、ルペー氏は儀仗を整へて之に臨みて演説し、ベルギーの大臣ル、ジュヤン氏は外國代表者となりて演説し、而して佛國前大統領カンミル、ペリエル氏は終始本會の議長となり、三十六ヶ國の公私の代表者之に列席し、來會者常に滿堂なりき。最も盛況を極む。該會主要なる議題として討論せられたるもの、左の四題とす。

- 一、在宅救濟の組織及效果如何。之が爲めに公の救恤と私の慈善の間に保ちたる又保つべき連絡如何。
- 二、道德上原因に由り家庭に置く能はず公の救恤若くは私の慈善に收容せら

れたる兒童の取扱及教育如何(感化院、免囚保護等)

- 三、仕事を給與する事によりて爲されたる救恤事業の性質如何、是等の意義を以て云へば、私の慈善事業にあらざるなきか如何。

- 四、手當なき肺病患者の救恤如何(醫療法の如何を問はず、唯之を救恤するが爲めに適用すべき方法)

爾後一週間セイン河畔に於ける萬國聯合會議堂に於て開會せられ、四部門に分ち、各部に屢火花を散して熱心なる議論ありしは、流石に問題は人をして眞面目たらしむるに由る。前後二回全會員を分ちて八九の團體となし、政府、市立、舊教、新教、猶太教等の設備にかゝる、巴里市中に於ける公私の救恤慈善事業に案内せられしは最も有益なりき。且つ各地より送れる報告、會員の論文等印刷物は積て山の如し。我國より政府代表者として井上内務書記官出席せられ、予は東京市養育院の委託ありしを以て、其實況佛譯を書記長ボンドル氏に呈出せしかば、大會報告上に掲載する事を約されたり。因みに一言せむ。今回の博覽會に於て社會的に最も興味多かりしは、教育部と社會經濟部たりき。前者は我國相當の陳列あり

しも、後者に至りては皆無なりき。而して各國の成績に對照せば、我國の實際か此點に關して如何に幼稚なるかは驚くに堪へたり。勿論一方より論ぜば、救恤慈善の發達は、其社會の不完全を證明する者なりと云ふを得べきも、反對に之が未發達は社會の完全を發表するものと云ふ可らず。我國果して憐むべき氓なきか、改良すべきの惡弊なきか、今や物質的發達は世界の大大勢にして、我國亦感化を蒙ると非常の速力なり。爲に益々物質的不平均を生じ乍ら、之に伴ふ可き物質的救濟法を講ぜざる時は、益々社會をして病的に陥らしむへし。予は他の輕率なる言論及び行動をなす者を取らざると共に、切に政府及有識者は遠慮審察を以て之か設備に着手せられむことを望み、各地寺院の僧侶、醫師は恫憫なる設計、繁雜なる理窟を擱き常識を以て考へ、人情を斟酌して惡しき少年あらは之を感化する事に勉め、病人あらば之を見舞ひ、貧民あらば之を世話して村郷の社交融和を謀り玉は、實に是社會事業の精神を得たるもの、予は一に其實行を切望するの外なき也。

萬國聯合宗教歴史大會は、九月三日博覽會内會議堂に於て發會式を舉行せり。

會長はコレイジヅ、フランスの教授アルバレービエール博士なり。而して今回出席せられたる和蘭の碩學チエール博士は名譽會長に推薦せられたり。博士は直に起て其厚意を謝し、亦英のマクスミューラー博士を名譽會長に推薦せんことを發議せられしに、滿場大喝采を以て之を迎へたり。翁は當時病中出席なきを以て電報を以て之を直ちに報知せられたり。爾後六日間ソルボン大學各講堂に於て八部門に分ちて開會せられ、又時々總會を開かれたり。主要なる演説は學士會院議員セナール博士が「佛教と瑜伽」と題して、兩者の教理上よりして歴史的關係あることを論斷し、巴里神學校長サブチエル博士は「バイブル批評及宗教歴史學」と題して佛のルナン及び獨のシュトラウス等の耶蘇傳に對して頻に辯護的口吻を弄し、ジュアンレピエール博士が「歐米に於る宗教歴史學教授の現況」を論じて、一目の下に各國大學に於る研究の模様を示されたるは最も吾人に有益なりき。特に極東部に於てはコレイジヅ、フランスの教授シルバムレピエール博士は數年前佛國政府の命によりて印度ニポールに於て梵典を取調べの時發見せし無著の莊嚴論梵本の事を辯せられ、又當時日本へ來遊して昔慈雲比丘の如き碩學のあ

りし事に驚きし事をも辯せられたり。又嘗て支那にて多年取調べられたる同校教授シヤパン氏は支那の宗教に就きて、同フーサー氏は佛畫に就て辯せられたり。吾國よりは嘗て多年同國に留學せられし藤島了穩師は出席せられ、維新已後日本佛教の現状に就て辯せられ、予は日本佛教の史的大勢に就きて報告せり。九月八日午前總會あり、フルーニエル、ヅ、フラ氏は一千九百年に於ける、世界宗教信者の統計を作りて之を報告せられたり。氏は十年以前に於て同様の取調べをなしたる人なり。而て數日前、氏は藤島師及予に質すに日本國民の宗教信者別を以てせらる、乃ち出來得る限り正確なる者を作りて之を渡したり。而るに氏の携ふる所をみれば、非常に誤れる者にて、日本に於て佛教信者と耶蘇教信者と殆ど同數ならむとする程なり。日本の事情を知らざる氏によりては無理ならぬ事なり。是嘗て我内務省社寺局に於て神道の講社、教會、佛教の講社、教會、及耶蘇教の教會とを同一の表に收め、其會數及會員を報告したるが根元なり。而て佛教の講社、教會なる者は單に信者の一部が便宜に結社したる者にして、神道の講社、耶蘇教の教會の如き宗教組織の正系をなす者とは大に其趣を異にす。然るに之を同一列に

書き並べたるが誤なり。而して某英文雜誌が之を翻譯する時は教會を Churches となしたるが故に實に奇異の現象を呈せり。抑々耶蘇教の教會に對しては確かに佛教の寺院を擧げざる可からざる也。佛教寺院の數は統計年鑑によりて之を徵し得るも、其信者數に至りては正確なる表を得ること難し。是畢竟日本にては西洋各國の如く、戸籍上に於て宗教を記載することなく、亦宗派寺院に於ても之が統計を作るなきによりてなり。日本宗教が行政上、又宗派組織上不完全なること夫れ此の如し。堂々たる日本國民の宗教別の統計表なしとは豈耻かしき至りならずや。外國とても教會に屬するもの必しも熱心なる信者と云ふにはあらず。然れども宗教制度及行政の整頓せるが爲め、日本人の口癖たる無宗教者を生ぜざるなり。日本宗教の不振はたしかに精神界の委微大原因なりと雖、制度組織の不整頓は大に與かりて力あるべし。衣冠正しくして禮樂興るを知らば、教界の經營豈一日も忽にすべしや。

次に本會を繼續する事とし、四年目開會の事とせり。サバチエル博士は發議し、希望案として「佛教及基督教」なる宿題を研究せられむことを提出せられしが、そ

は教理に渉るものとして、本會の趣意にあらずとの異議あり、乃ち佛教及基督教の歴史的関係と修正せられたり、又博士の提出にかゝる日本佛教家に對する希望案は、滿場の賛成を以て迎へられたり、乃ち左の如し。

日本佛教各宗寺院諸師に希望す、竊くば西洋學者の研鑽に對して、永久渝らざる協同を與へられむが爲めに、左記の事項に就きて歐文を以て印刷せられたる雜誌を發行し、以て補助せられむ事を。

一、日本に現存し若くは日本に於て成れる佛教々典圖書傳記等の報告及解題

一、寺院中に保存せられたる圖書、繪畫、彫刻等蒐集物の目錄。

一、宗派的著述の翻譯。

一、日本佛教現狀に關する文書。

西洋宗教學者の日本佛教に就て知らむと欲すること此の如し、予は日本佛教諸師に對して此希望を傳ふのみならず、國民全般に向て此の如き貴重なる宗教の日本に現存せることを自覺し、進んで光輝を世界に光被せしめられむことを切

望せざるを得ず。

同日午後閉會の式を舉げ、同夜エツフェル塔上に於て晚餐會を開く、恰も中秋望月に際す、互に靈光の發揮を約して散す。

萬國宗教歴史大會の報道を一讀せられたる人は、西人か佛教をも信奉し、佛耶兩教一堂の下に會合して、世界的傳道にても講じたるかの如き速斷を下さば大なる誤解なり、既に其名の示すが如き學者の會合にして、且つ研究的態度を取れるに外ならず、而して實際其社會に於て信仰を支配しつゝある宗教の狀態は如何、正に是れ羅馬舊教の根據地、教國主義の本家にして、耶蘇教本來の面目を顯はせるもの、見聞する處心を塞くせしむるものあり、舊教の現勢につきては、左に一斑を列記せむ。

佛國に於ける舊教信徒の總數は、三千九百萬にして、新教は僅かに九萬、猶太教一萬と云ふを以て見れば、先づ其大勢知るべきなり、國家はナポレオンの締結せる宗教條約を盾として、其勢力を支へむと勉めつゝありと雖、實力は中々侮るべからざるものあり、全國十八のアーチビショップ七十二のビショップ(宗教條約

には前者十人後者五十人の筈ありて、寺領組織を以て全國を總轄すること恰も英國々教の如し。巴里にはフランソア、アリ、ベンジャミン、リシャードがカーヂナルとして總轄し、市内は二大教區七十一の寺領に分たる。而して此等の教區組織を以て縦の組織とせば、横の組織とも謂つべき僧若くは尼の組合あり。是實にオルデンなるもの、舊教傳道の精兵にして最も注意を要する者也。僧に屬するもの三十九、尼に屬するもの一百なり。各其組合の性質に隨て其事を異にすと雖、何れも猛烈なる手段を以て教域の擴張に勉めつゝあり。現時最も勢力あるものはフレール、デ、ゼ、ユール、クレチエネなる者にして、教育事業、慈善事業を主とし其成績非常なり。昨年於て同組合に屬する學校生徒數佛國內にて二十八萬八千一百卅二人、佛國外にて三十二萬二千五百七十三人あり、予其本部を訪ひたるに、舊教としては意外なる寛容を以て予を遇し、秘密に屬する上記の統計を示せり。次に勢力あるはセシユイット及びドミニカンなり。此二者は宗教改革後猛然として起り、獨逸に於ける半分を新教より回復したる者にして、特にセシユイットは世人の知る如く、舊教中極端なる組合にして、嚴格なる訓練を以て國家となく、

社會となく、向ふ處悉く破壊して猛進する者、其本部を訪ふ、二重の鐵門ありて、如何にするも門番の僧は予等をして其内部を窺ひ知る能はさらしむ。ドミニカンは熱心なる傳道説教を主とするものにして、常に各家に就きて説き且つ説教を印刷に附し配布することを主とす。又フランシスカンも勢力あり、殊に其一派カピタンなるものあり、常に褐色の衣を着し、細帯を纏ひ、殆んど頭の全部を剃り、革を以て作れる板の如き履を穿ち、足を露はして行く、何れも自ら處する極端なる制欲主義、遁世主義を以てし。一方には濟世の方策を講して社會上に事業を經營し來る、尼の組合は常に病人の看護、貧民の世話を事として他に餘念なし。其國家社會上非常に危険なるにも拘らず、益其勢力の盛なる者、偶然にあらざるなり。今年に入りて佛國內閣は一種の會合條例を議會に提出して、オルデンを抑壓せむと企てつゝあるも失敗に屬せむとし、獨逸に於ては舊教黨たるウルトラモンタンは宗教自由を口實として議案を本年の議會に提出して、オンデンの禁を解かむとせり。政府の反對によりて、事成らざりしも以て其勢をトすべし、而して衰餘の西班牙は今や正さに國民が反オンデンの運動の爲に大に蜂起し、一揆鎮撫の

爲めに政府は戒嚴令を布きつゝあるにあらざや、清國事變に於ける宗教的關係の要點は果して能く洞察する人ありや。我國十萬の耶蘇教中其半數は舊教に屬するにあらざや。米國の新天地最も多數の信徒を有して、非常の速度を増殖するは實に舊教にあらざや。予の米國バーチモアにカーヂナル、ギッボン氏に遇ひたる時、氏は米國は歐洲に比すれば傳道の自由にして好望なるを叙し、且つ曰く新教は數百の分派をなすも、舊教は此の如き多數の信徒皆予か配下に一轉せりと揚言せり。國家宗教の關係に注目するの人は已上の言論に耳を傾けよ。冀くは予を宗派的感情を以て立言するものとなす勿れ。予は精確なる事實を以て警戒する者、予は實に言はむと欲する十分の一をも言はざるなり。

基督教の國家關係の問題に至りては、近時著しき問題の續々として起れるをみる。特に舊教に於て其弊の甚しきを知る。本年に入りてより羅馬教主は基督教の社會主義の教諭を發し、膠州灣事件の張本人として有名なるヒシヨツプ、アンチエルは、北清事件に對する世人の基督教傳道の批難に抗辯し、殊に本年三月二日教主レオ十三世は九十一歳在職廿九回の誕生日に於ける、カーヂナル等の祝

辭に對する答辭として一場の大演説を試み、先づ法王政府が世界的權力を主張し、近時歐洲各國に顯はるゝ反對的態度を慨嘆し遂に結論に於て佛國國家の措置に對して極力之を批難せり。實に國家宗教關係の問題は刻下最大急務として研究を要する者。而して此報を一讀して心を寒からしめたるの日本佛教者は、翻て左の巴里に於ける慈善事業の概況をみて其偶然ならざるを察し、猛省一番其本職に忠實ならむことを切望す。

先づ小兒保育事業に三種あり。第一種は産婦養育場にして其數三十八。第二種は嬰兒養育院其數六十二。第三種は三歳より六歳に至る小兒保育院にして、學校等の内に附屬せり。此等の五分の三は舊教に屬す。又棄兒院、孤兒院の數は實に多數にして市内にても一百を下らずといふ。市の事業に屬するもの多し。又老年多病者教育場九十餘、癩疾貧民救濟所二十餘、囚徒滿期者惡少年保護場三十餘、何れも此中舊教に屬する者多し。食物施與所三十八あり、内二十は博愛會の事業にして、他の十八は舊教の一組合たるサンツンサン、ゾポールなる會の事業とす。施藥所、無宿人宿泊所等の舊教に屬する者非常に多し。貧民病院及び貧民救恤院にし

て教會に屬する者十六。

教育事業にして舊教に屬する者非常なり、初等教育に屬する學校百七十、中等教育に屬する者男校二十六、女校六十七、高等教育に屬する者男校十二、女校三、職業學校徒弟學校は男校八、女校五十四、其他職工保護場男女百五十餘、兵士保護會十二、學生及び青年保護會十四あり、巴里學生舊教會は學生の信仰を養ひ、護教會は百般の問題に關して舊教の護持を事とせり、而して言論社會に於ては數種の日刊新聞、週報勢力ある者頗る多く、下層に向ては無手数料金取扱あり、真正なる結婚媒介あり、以て百般の社會に於て勢力を占むるもの決して怪むに足らざるなり、予は舊教主義の國家を害し、進歩を妨げ、文明を毒するの大なるを確信すると共に、事實上に於ては着々其實際的經營の偉大なるに、驚嘆せず、むばあらず、確かに是れ、彼の徒らに言論を壯にし、理想を天外に馳するを以て能事とする日本佛教者の靜慮を價する者也。

猶巴里滞在中、コンコルダトを初め、佛國宗教法につきて取調ふる所あり、是より先き、池山君は五月米國より直ちに獨逸伯林に向ひ、既に一學期の研究を終

へて予と巴里に會せり、乃共に前記諸種の視察をなし、九月十八日同道南獨旅行の途に上る。

南 獨

獨逸聯邦は宗教改革當時其國王が一定の宗旨を採用せし歴史より、各邦宗教の狀況を異にし、新教舊教國により其勢力を異にし、隨て宗教法の如き各之を異にす、是彼の英若くは佛の如く其一部を以て全體を想像する能はざる所以なり、先づ順路として南獨諸州中著しき首府を訪ふ。

ストラスブルヒはアルサス、ロートリンゲンの首府にして、普佛戰爭の結果獨に歸したるもの、獨中にありて最も變則なる宗教法の行はるゝ所、勿論舊教徒最も多く、隨て舊慣を存して佛國的の宗教法の行はるゝ所なり、且他の聯邦諸國と異りて、獨逸帝國に直轄せらるゝ所なるを以て、亦幾多の例外あり、予等舊教の宗教的旅宿に泊す、舊教にカトリック、シヤリテあり、新教にエバングリッシュ、フェラリンあり、各慈善事業の中心たり、何れも視察せり、舊教にては政府が新教に與みして己を壓制するを慨し、新教にては舊教が妨害して教稅徵集を實行し難き

を嘆せり。兵營附の會堂新舊兩教相對せり、以て其教勢を察すべし。同所に大學あり、ロイマン博士梵語學を以て名あり、高田派新法主の久しく就きて學ばれし所。博士溫厚親情溢るゝが如し。予か宗教學の研究につきて指導を與へらる。而して恰も中央亞細亞古文書研究の小作成りて之を諸方に遞送せらるゝ時なり、乃之を惠まる。又現時淨土宗の荻原渡邊の兩君亦就きて學ばる。滯在中屢々會談し與限りなし。亦博士の紹介によりて同大學の國法學者オットマイヤー博士に面會を得、アルサス、ロートリンゲンの宗教法につきて教を受く。池山君諸種の疑を提供して之を質す。博士詳に之を誨へ、後徐ろに研究の目的を問ふ。乃實を以て答ふ。博士大に同情を表して其成功を切望せらる。

次にウエルテンベルヒの首府スツットガルトに至る。同國は最盛なる新教國にして、信仰の深きと獨逸中の最と稱せらる。日曜日の禮拜の如き廣大なる會堂中殆むど空席なきが如し。米のポストンに髣髴たるの感あり。漫ろに宗教改革の當時を追想せしめたり。而して慈善事業の周到整頓せる獨逸中の最と稱せらるゝ所。予等は青年會旅宿に泊し、エハンゲリツシユ、フエラリンの牧師コップ氏を

訪ふ。氏靜穩にして周密頗る人物なり。氏密に宗教的組織及實際に就て語られ、日々市街傳導者をして案内せしめらる。且つ恰も同所にありて一週間傳導會議ありて、コンシストリヤルラート出席同國內の有志數十人相會し、知名の士諸種の問題に付て演説し、慈善事業につきて研究するあり、乃ち之に列するを得たり。且つ同會員と共に諸種の營造物を見舞ひたり、宗教寄宿舍、監獄、盲學校、貧民救濟院、貧民行旅者宿泊所、孤兒院、幼稚園、嬰兒預所、一々配し難し。其最注意を惹き最興味を與へたる青年會の組織、日曜學校、オストハイムなる社會殖民組織あり。何れも珍らき事にあらざるも、同地の如き愉快氣に發達したるものは稀なり。青年會は時々青年の會食あり、早上粗食を樂みて嘻々として語る。又幼年者の園遊會あり。郊外林檎園の紅顏累々たるの處終日運動し、或は遊び或は食ふ。又土曜夜講義あり。講師熱心に説き滿堂の青年聲を吞ひて聴く。日曜學校は市中各所に同時に同様の教授をなす。而て予等はコップ氏が特に貴族等高等なる家庭の小兒を教授するの實況を見たり。數百の童男童女中數十の女教師を配置して之を分擔し、氏か總指揮の下に親切に之を教ゆ。最も感じたるは同市郊外オストハイムなる所

あり、有志者の出金によりて家屋を新築し、之を貧民に貸與するの組織ありて、而して一定の年限其屋賃を拂へるものは遂に其後之を給與する者にして、貧民に家屋を與ふるの目的を以て起る。若し中途にして出づるものは無効にして、又決して他に譲渡すを得べからざる組織なり。今や家屋益増加して數百に上り、宛然一個の市街を現出せり。是頗る有益なる組織にして、大に研究を價するものなり。又スツトガルトには社會的原理に基きて共同生活を營ましむる寄宿舎あり。常に一の空室なしといふ。之を要するに同所の社會的施設は頗る整頓せるものあり。滞在旬日余去りてミュンヘンに向ふ。

ミュンヘンは乃ち獨逸中舊教の最も盛なるバイエルンの首府にして、恰も前のスツトガルトと正反對なり。王室附の會堂高く聳へ、羅馬廷の使節館あり。政府教務省に就きて教會誌を取調へ、市廳に就きて慈善事業を取調へ、牧師オステルタハ氏を訪ひて、新教の概況を知り、又舊教施設の事業をみる。何時もながら舊教の教育感化の巧みなる頗る感すべきものありき。千篇一律の嫌あるを以て之を容す市街瀟洒、美術發達し、建築頗る趣味あり。

澳匈聯邦

南獨の境を出て、澳大利の首都ツインに入る。國勢頗に一變して風物悉く蕭條、轉々感慨の情に堪へざらしむ。昔日獨逸人種の盟主となりて赫々の力を揮ひしもの、今や覇權、普滯士亞に移りて遊子をして秋風落日の感を催さしむ。人種は頗る雜多にして國民に統一なく、思想亦様々に分れて殆むと適歸する處を知らず。宗教は最も舊教にして、頗る固陋に陥るものあり。澳國の舊教はヨセ施設フニ世によりて經營されたる純然たる國教制度は其根柢をなせる者にして、其實に當年の隆盛を想起せしむるものあり。有名なるサンスマン教會に詣りて其構造を見るときは、實に巴里のノートルダムにあるの想あらしむ。而て其信者が金色燦爛たる俗悪なるマリヤ像下に接吻するを見るときは、如何に其信仰の古風なるかを知るに足らむか。舊教のセミナールに往きて之を視察す。其他宗教上の大跡に於ては、小巴里と稱するの適切なるを見る。小學に於ける宗教教育の如きも純然たる舊教主義なり。而して美術文藝の點に其特徴を發揮すること亦巴里に類するあり。繪畫博物館の如き、オペラの伎倆の如き坐ろに佛のルーブル及び

ロイヤルアカデミーを再び見るの心地せり。建築の如き亦見るべきものあり。友人池山君スツットガルトに於て病を得て數日平臥し漸く癒へたりしが、此地に於て再發す。幸に忽ち快復して匈牙利に向ふ。

東洋人にして匈牙利の首都ブダペストに遊ぶもの、一種言ふべからざる感慨を抱かざるべからず。是歐洲に於ける唯一の東洋人種國人は吾人を迎へて歡呼に至らざる處なし。況んや國勢は旭日の暈々たるが如く、耳目に觸るゝもの壯快言はむ方なし。正さに是れ澳國と恰も正反對の位置に在るもの、久しからずして澳國の羈絆を脱して驥足を伸べむこと疑ふべからざるなり。宗教は同じく舊教なり。と雖、其勢の活潑なると之を澳國に比するに同日の論にあらず。今や同都中央に高壯巍然たる一大教會を建築しつゝあるを見て以て其一端をトすべし。而して舊教のみならず、新教も近時其勢力を擡ぐるに至れり。殊にユニテリアン派の増加甚だしきは最も著しき顯象なりとす。近時宗教團體の取扱につきて、幾多の新法令の發布せられたるものあり。吾人の参考に資するもの多し。唯同地の研究に不便を感ずるは其言語の一種特別なるに在り。而して吾人の最も感じたるは

同地の言語が研究頗る發達して、全く羅馬字を以て之を寫し、自由に其國語を應用するの點にあり。現に匈語を以てオペラを演じ、優に文藝界に於て、他の羅馬日耳曼人種と駢馳せむとするの氣慨に至りては吾人の最も多とする所。獨逸に於ける有名なる音樂家リストか匈人種なるを見れば如何に其人種の伎倆を知るに足らむか。蓋し是れ吾國の如き將來此に鑑みて奮勵せば、現時の如く藝術は白哲人種を凌駕すべからずと云へるが如き、小乘的根性を打破するに足らむか。建物の如き其特性を保存して趣味津津たるに至りては、吾人をして感嘆措く能はざらしむ。一日宮城を拜觀す。小丘の上に位し、俯してドナウの清流に臨む。時正に十月、満目の秋色畫圖の中に在るが如し。ガレリーの大理石を纏ふの葛、ホテル窓下の紅葉、遊子をして轉々懷郷の情に堪へざらしむ。淹留すること數日、涼車に乗して北に馳せ、沃野千里、將來の好望を論じつゝ、獨都伯林に着し、茲に半歳の旅裝を解くと云爾。

《完》

伯林より

拜啓仕候、久しく御無沙汰申居候處、御兩親様御揃ひ御障りも無之候哉、何分にも寒氣に向ひ候へは、御用心の上にも御用心被成、御自愛專一に奉存候、降て小生無事健康に御座候間、御安神被下度候、去る十月二十六日、獨逸伯林へ到着致候節、不取致葉書差上候、其時も申上候親友吉田静致君も近所に被居、又同行の池山君も近所に被居候、同君も頗る好人物にて三人愉快に暮し居申候、此先の手紙に………御心配被下、爲法の御精神紙面に溢れ、朕兒深く感動仕候、………併何事も佛祖の御冥加にて都合よく行き申候間、案するよりイツモ好結果にて不思議に御座候、當時は伯林に止りて大學へ通ひ、一方には取調居り申候。

先送中は日本にては御正忌にて、雖有き事なるべしと想像致居候、洋行已後所持致候日本の本は御經と御聖教のみに御座候間、日本に居りたる時よりも餘程度々拜讀致候御正忌の時ツク、大經を拜讀致し、實に難有感佩仕候、トカク日本にては人が御經を大切にせず、之を味ふこと少きは、大に残念と存じ、歸朝の後は是非共誰にも分り安く、延書に致度と存候、實は人のことはトニカク私自身が今迄常に經文を味はざりしこと、大に不覺と慚愧仕候、是れが今年の報恩講の時に遇ひ奉り、西洋にて遙拜したる餘德に候、勿論御假名聖

教は常に拜讀仕候。

此手紙着致し候、頃は恐くは正月なるべしと存候、如何にも正月の様子想像せられ候、常音も是非歸省致す事と存候、常音が時々詳しく日本の様子を報知してくれるので、大に事情相分り結構と存候、不肖も半年已上丸々旅行中にて、心も身も寸暇無之、ロク／＼手紙も差上不申、イツモ菫葉書で御免を蒙り、定めて字が小さき爲、御老眼には御迷惑の御事と想像仕居候、今後は時々手紙にて御話申上べく候。

馬上の伯母様大に御待ち被下候由、如何なる譯にや旅行中私もよく伯母様を思ひ出し候も、奇妙に存候、全体西洋では日本と反對にて、子供や親子は瘠せて、老婆になるほど大層肥太り、皆マル／＼と致居候、諸方の孤兒院病院等の慈善事業を取調へに参り候處、其主なる大將様の老婆は、何れも感心な、ソレハ／＼善い人が多く有之、其老婆がエラク肥太りて、梯子の上り下りに自分の身の持運びが餘程困難らしく、寃え候、其時は何時も直に伯母様を想ひ出して、丁度此様に肥へたシカモ善い人トやと思ひ、幾度となくアリアリ御目に掛る心地致候。

西洋と云ふ所は何事も立派に有之候へども、頓と小生には氣に入らぬ所有之候食物なども、大に日本食を欲し候、伯林には日本婆と稱してよく日本食を作る婆様有之候、折々は此處にゆきて日本の味ひ申候、母上の御料理、江州の菜漬、杯大に想ひ出され候。

度々の御手紙に、佛前の御障子新調出来御満足の由御報知に預り、不肖も實に嬉しく存候
當地寒氣は随分殿敷、日本ならば北海道と云ふ有様に御座候、併室内は暖爐の御座にて頗
る温かに候、此頃は定めて炬燵三昧の御日暮しと存じ、御障子述かに想像せられ候、何分に
も御自愛奉祈候、先づ是にて拙筆可仕候、頓首。

明治三十三年十二月二日認

伯林にて

常

音

折々に阿兄をしのびて

常 音

繪雀のとびしためしのありとさく

我にものいへ君がうつしゑ

おもひやる君がみ影をうつさなむ

ことしの秋のもちの夜の月

こそその秋望の夜月はきよかりき

ことしはなごか曇りがちなる

君戀うていねし夕のあけがたに

ちほつかなげの夢を見しかな

朝ぼらけきぬゆく星よことゝはむ

五百重の波路今やすきかと

浪は五百重雲は五百重のはてにして

聴く人ありやみ佛の道

さおもへどさすが心のゆらぐかな

瘦せたる君をゆめに見しより

朝雲の西にやけぬときしより

母の念佛のこゑほそうなり

それとなく空を仰ぎて入相の

雲のいろにも君をおもふかな

まだなれぬ荒そ海邊の浪の音に

くだきくだかれ君をしぞ思ふ

未遂はかくぞくだけでかくぞちれと

さしやき顔の激波の音

み佛の強きなさを身にしめて

かくて今年もすどしつるかな

このまゝに枯れもはてなば法の水

世の人なみをいかにしてまし

何となく今宵の雨はいや淋し

わが思ふ人よ奮みずてあれ

巳下五首叔父の訃を知らする時

あはせずてゆきつる人の今はをば

かきてねくるがくるしかりけり

このまゝに唯なきてのみありなむか

しるしの石に苔のむすまで

亡き人のみ墓のちりを拂ひては

今日も涙をさしげつるかな

入相の鐘の音ほそくきこぬきて

み墓のしきみほろくとちる

み墓邊に香たきそへて亡き人の

そまひをしのぶ夕まぐれかな

*

*

*

*

*

*

久保の吉

志賀の海竹生の島の辨才天

君が船路をまもらせ玉へ

たゝなはる大波小波やすらかに

越へて着きぬの御文を待たむ

二柱親のみことも君をまちて

おなじ夢をば見ていますらむ

日本花祭

(明治三十四年四月八日伯林に於ける釋尊降誕會)

三月末日四月一日の交伯林在留の日本人の間に議あり曰く四月八日佛誕生の日をトして日本國民古來の習慣たる花祭を行ひ日本に同情を寄せ佛教に嗜好を有する西人を招きて其喜を分つこと恰も彼か耶蘇降誕祭に於て其歡を吾人に頒つが如くせば或は東西民族相互の禮讓に於て相備るのみならず西人の腦裡容易に東亞を領解するの一助たるを得むと議忽ち傳はり甲唱乙和三日直ちに發起人會は開かれ三日既に發起人署名の招待狀は四方に頒たれたり紀念の爲め諸氏の名を記すること左の如し。

文學士師崎正治、文學士近角常親、文學士藤代政輔、文學士芳賀矢一、池山榮吉、東洋語學校教授藤谷季雄、海軍主計少監龜田重一、法學士倉知鐵吉、文學博士松本文三郎、農學士松村松年、法學士英渡部達吉、醫學士宮本淑、森孝三、陸軍大佐長岡外史、文學士園田宗憲、玉井喜作、伯爵津輕英麿、文學士吉田節致

三十有餘の新聞紙は争て之が報道を傳へ日夜出席を請ふもの囑を接す事益々豫想より大にして結果を憂ふること益々甚だし蓋し言辭を異にし宗教を異にし風俗を異にする歐洲の大首府にありて而も其異點を發表して而も明晰なる領解を得圓滿なる結果を收めむと擬す至難の業と謂つべし而して結果は良好なる成績を齎らし意外なる成功を告げたり從來の日本同情者は非常の満足を以て其好意を謝し未だ日本を熟知せざりし人は益々尊敬の念を起せり吾人は茲に徒に自ら謳歌の筆を弄するを止めて寧ろ當地諸新聞の記事と評論とを披萃して報道に代むとす是如何に西人が理解せるかを知るの便あればなり曰く

吾人基督教徒が復活祭を以て吾人開宗者の苦難歴史の紀念日としてのみならず永き淋しき冬を送りて春の再生せる祭として祝するが如く亦日本に於ける佛教徒は花祭を以て其開宗者たる佛陀の紀念としてのみならず春の祭として之を祝するなり何んとなれば百花爛熳たる春の真中に於て彼の覺者佛陀は此世界に降誕したればなり。

昨夜 Hotel Vier Jahreszeiten (四季樓)——實に此名たるや、長崎に於ける旅館に於て日本文字を以て書かれつゝあるかの感を生ぜしむ——の大室に於て彼の詩的に云は、花の祭、猶一層進みて宗教的に云は、佛陀降誕祭は現時伯林滞在の日本人によりて、今年初めて祭日とし執行し肇められたり。

大室の横壁には高く爛熳たる花を以て蔽はれ、赤黄白褐實に春の色を一室の中に鐘めたり、嗚呼此の地に在りては本國と異りて暖室によりて作られたる春たるなり、而して此百花爛熳の中に於て、綠滴らむとする、棕櫚愛らしき、青葉の間に絹を以て蔽はれたる卓上、一の花御堂は建てられ、其柱や其屋や、脚躡花若くは椿花を以て巧みに飾られたり、而して其中に小なる佛陀の愛らしき銅像を包めり、嚴肅なる法服を纏ひたる僧侶二名亦是に列席せり、此小なる佛像は誕生祭の爲めに用ひらるゝものにして、實に清淨無垢、其容も亦全く嬰兒の形をなし、如何に頑固なる耶蘇教僧侶と雖も、之に對して異論を挾むべき餘地を知らざる也。

多くの日本人は歐服に代ふるに日本服着物を以てし、何れも獨逸の友人に對して、温き柔かさ愛すべき而も嚴かなる鄭重を以て接待したり、出席の伯林人中

日には東洋風の模様を着し、菊花を挟みて耳飾とし、又日本絹をも纏へる者ありし、之を要するに、何れも互によく調子相協ひて最も領解せむことを勉めたり、而して當日來會せし多數の人々の中、佛教の何たるか、又此祭の意味の何たるかを知れる人々は實に少數に過ぎざりしに、當日演說者の莊重なる談話は遂に無頓着なる賓客をして耳を傾けしむるに至れり。

既にして劇院として音楽起り、一座頗る靜まりたる頃、大佐長岡外史氏は起てり、大佐の襟には諸種の勳章赫けり、氏は來賓に對して親しき切なる挨拶をなし、且つ日本語を以て一場の演說を試みたり、判事プロスト氏は大佐の演說を獨譯せり、曰く、日本に於ては西曆五百五十年頃佛教渡來して已來久しく國民の道徳を涵養し、心量を感化し、今日にありては其本國よりも寧ろ日本に於て其精華を鐘め、日本佛教として特性を有するに至れり、而して日本が晚近泰西の文化を輸入して、容易に十分之を消化するの能力を有する所以のものは、數百年來既に地盤を耕したる結果によらず、むばあらず、かく云へばとて此會の目的が歐洲に向て佛教を傳道する爲にはあらず、唯吾人日本人が此が爲めに如何に幸福なるや

を喜び、此時に際して唯諸君の賓臨を請ひたるに外ならず、猶此已上の目的ありとすれば、獨逸及日本の兩國人が益々親密にして、互に國民的特性を容易に領解せしめむと欲するに外ならずと、而してプロスト氏は猶進みて此會の必しも純宗教的ならざるを辯ずると同時に、東洋事情を熟知し、既に日本に漫遊せる同氏は佛教の道德上に及ぼせる所見を述べて曰く、佛教信者なるものは諸種の關係に於て思想若くは行為何れも之を我西洋の習慣に比すれば一層理想的にして、殊に其道德教訓が財産所得に就て宏量なること、日夜金錢收獲に凝視する吾人の文化を以て殆むと想像し得べからざるものあり、且つ佛教の教理は諸種の形式の忠實、各自の勉勵、心靈の解脱を誨ふるものにして、是確かに吾人は獨り自己の道德觀念のみを絶對的に正確なりと臆斷すべきにあらずして、他の道德觀も時として吾人已上に出づることあるを説破するの教誡なり、吾人は既に熱心に勉勵し、智識ある、美術的なる、學術的なる高潔なる日本人民を尊敬することを知り、故に吾人は此祭が獨逸に於て初めて大なる公に於て、獨逸人及日本人共に會合して執行せられたるを欣ぶ可き也、數年已前にありては恐らくは、此の如き

祭を伯林に於て行ふことは不可能の事たりしならむ、而して今日之が行はるゝ所以のものは時の進歩の徴表にして、又獨逸帝國首府が繁華なる世界的都會たることを意味する證據なりと論じ、猶同様にストラスブルヒ在留の日本人間に此の祭の執行せられたるを披露し、同所及ウハースパーアンより來れる祝電を朗讀し、最後に日本帝國及日本人の萬歳を唱へて壇を下れり。
 獨人に於て姉崎學士は此祭の歴史に就きて辯じ、非常に感動を興へたり、彼は巧みなる獨逸語を語り、一言一句聽者をして何の苦もなく、其思想を追ふを得せしめたり、彼は吾人の耶蘇復活祭が花祭と本年同時に相合せることを述べたり、而して時に於て相合するのみならず、耶蘇復活祭は救世主の蘇生を祭るものにして、此蘇生の爲めに人類の救済及び解脱は來るものなり、而して佛教徒は同じく其教主誕生の時に當りて、往昔解脱者の出現を祝するなり、其出現の當時一手は天を指し、一手は地を指し、兩者の間救済を持來さむことを示せり、爾來此祭印度支那を経て來り、古來日本に於いて大に行はれ、殊に輓近大學生を初めとして青年學生間に行はるゝ事益々盛なり、而して此誕生祭と彼の復活祭とは共に三

冬嚴寒の氷結を脱して、春光和融の世界の出生を示すものなり。此二者の祭の相合するもの決して偶然にあらずるなり。然れども彼は二者教理の異同に就きて語らむとするものにあらず。唯彼の花香花光の世界に充滿するを共に語らむと欲する也。其香や其光や宗派の異同を問はず、職業の如何に拘らず、古今東西共に喜び共に樂むを得べき也と。

哲學者に次て詩人來れり。東洋語學校の巖谷季雄教授は獨語を以て實に美麗なる自作の詩的御伽譚を讀めり。其思構は躑躅嬢と椿嬢の二人が裸体なる小佛陀の爲めに衣を縫はむとし、遂に之が報謝として永久花祭に向て爛熳として花發くを得ると云ふ妙想なり。實に是れ非凡なる天才。吾人は近時獨逸の詩人が其傑作を出すを見る。而て此日本人の技倆は確かに克く彼等と共に駢ひ駢するを得む。彼は愛すべき優美を以て要點を飾り、詩想と諧謔を以て色を交へり。而して彼は如何にも無邪氣に行ひ小兒の如く愛すべくして遂に衆の心を奪へり。是實に日本着物きたる小説家なり。滿堂の喝采によりて彼は本來獨逸の詩人たること難からざるとを證明したるの後、和獨會長ブルン學士は簡單に獨語を以て前

置をなして、日本語を話して漸く國の面目を保ち、大に日本人の爲めに其郷音を喜ばれ、殊に列席せる二人の僧侶の賞讃を博せり。破顔微笑常に温容客に接したりし一人は益々満足の色を顯はし、眞面目なる容貌をなして此時まで一笑をも洩さざりし他の一人も俄かに金の眼鏡を正して若き獨逸人を喝采せり。最後の演説は日本人に屬し、藤代學士は流暢完備なる獨語を用ひ、天賦の演説家たる學者的沈着を以て簡單なる演説を試み、以て貴婦人の爲に祝せり。彼は貴婦人を花祭と近き關係に持來し、且つ謝して日本國にありては此祭は殿堂の前百花爛熳たる青天の下に行はるゝを常とす。然れども當地北寒の所にありては未だ美花祭に供すべきもの頗る乏しく、以て憾と爲す。然るに頼に貴婦人の出席を得て此祭を眞の意味に達せしむるを得たり。茲に聊か謝意を表するが爲めに花御堂の花飾を頌ち呈するを得むと、語々古詩を參樹し、句々音調整ひ、其内容の美麗なる其想構の巧妙なる聽者をして感嘆措く能はざらしむ。彼は獨逸帝國の萬歳を唱へ、滿堂相和せり。

かくて此祭の眞面目なる部分は、終りて今や愉快に相語り相親む而して戶外

には獨逸の春の祭として春雨アスバルトの街を打ち内には花と燈の下に日本の春は赫けり。

是實にペルリーネル、ターゲブラット、クラフネ、ジャーナル等の記載を採萃したるもの、其他ポスト、モルゲンポスト等皆何れも口を極めて賞讃せざるなし、實に當夜の來賓内外四百人に下らず、陸海軍將校あり、文官あり、學者あり、何れも皆頗る満足を表し、日本の精神的文明を領解し敬意を表すること益々深し。

最後に一言缺く可からざるものあり、曰く、此の如きの會合が海外在留の邦人によりて容易に成立し得る所以の者は其動機種々あるべしと雖も、之を要するに國民自覺の時機熟したるの結果たらずむばあらず、而して獨り伯林のみならず、獨のストラスブル、米の桑港何れも同日同様の會合ありしといふ、其他海外各所に此企ありて未だ吾人の耳にせざるもの多かるべし、而して遂に想ふ、故國今や正に櫻花爛熳として六十餘州に開き遍からむとす、當日は大日本佛教青年會の第十回降誕會を初として、全國各地の會合頗る盛大なりしものあらむ、海外萬里同歡同喜の情を報ずること此の如し。

和蘭陀より

武岡兄足下先日業書送上來通り當地にて(伯林)釋尊降誕會を營み申候、初め池山君吉田君と謀り、園田君、崎崎君、藤谷君とも謀り遂に意外の好結果を得候、不取敢當地新聞の批評を購して「日本新聞」へ投書致置候間「政教時報」紙上に御轉載被下度候、別に認むる程の事も無之と存候、猶當日の寓寓有之候間旅行後御送り可申候、昨日より池山君と共に和蘭陀を経て倫敦に至り、踏踏伯耳義を通るべき旅行を企て申候、只今和蘭陀に滞在仕候、同地は慈善事業盛なる土地にて、本日は孤兒院(市立)又ルーテル教會派の孤兒院又育學校を一覽致候、建類も完全にて殊に後者の完全したるには一驚を喫し申候、前者の獨語佛語等中々總者なるには感心仕候、音楽等の巧なる實に人をして融然同化せしむるもの有之候。

社會事業に對しては日本は遂に歐洲劣等國にも及ばぬ有様に候、何卒佛陀醫願の意を此社會に實現して首なるものには、かく天賦を興へたきものに候、明日は當地の救世軍を參觀の儀に候。

此度の降誕會は何となく皆々ロク氣がソロイ數日間に出來上りしかも、非常の好結果に有之候、メソカに是れ國民自覺の時機來りて其自己の特性を發揮せんとする心が、一般に溢れたる結果と存候、何れ宗教自覺の時機來るも遠からざるべしと存候、嗚呼大日本佛教青年會降誕會を肇めしより第十回に至りて此事あり、一ノハ嬉しく存候、諸君と共に佛陀の冥祐を感謝せん哉、二週後伯林に歸りたる後、カール宗教法を贈るべし、山立後既に一週年に相成候、人事勿々の感に不堪候、諸君へ宜敷御傳へ被下度候、頓首

明治三十四年四月十五日

和蘭陀アムステルダムにて

常

觀

ミルトンの隠れ家、ペンの會堂

明治卅四年五月予再び英國に遊び、社會事業を視察し、一日癩癩病者治療の爲めに設けられたる殖民地を見舞はんとて出づ。場所はチャルフォント、セント、ピーターとして倫敦を去る十八哩なり。リックマンズオースと云へる所にて瀛車を下り馬車を驅り田舎道を辿りて行く。此よりスローに至るの道條は文學的趣味に富めること、倫敦近傍他に其比を見ざるなり。よく整頓したる牧場に、一面綠萌々出て、恰も毛氈を敷きなせるが如き、英國特色の野趣を賞しつゝ、行くうちに、風光明媚人を迷はしむるが如き小村落に達せり。古雅なる人家三々五々相連り、一帯の小丘草綠なる中に、白き櫻花は爛熳として咲き亂れたり。願みればミルトンス、ヘッドと云ふ宿屋あり。驚きて案内記を緝けば、チャルフォント、セント、デヤイルスとてミルトンが隱家のある村にして、失樂園を書き終りて復樂園を書き始めたる所なりといふ、一讀懷古悽愴の情に堪へず。直ちに車を停めて其遺跡を訪ふ。家は恰も日本家屋に似たる、低き質朴なる田舎作りにして、古風の烟突は道に沿ふ

て立ち窓硝子は格子作にして瓦は赤くして古色あり。殊に壁は青々したる瓦を以て蔽はれ、趣味拗すべきものあり。其道に近き一室は、詩人の居住せし儘にして彼の旨詩人は恐くは此室に坐して、第二の妻エリサベスをして、復樂園を書き取らしめしならむ。入口を中心として反對の側に一室あり、古き木造の煖爐臺あり。是當年の物なるべし。詩人の像及び遺筆等紀念の品は室内に配置せられて、一として其高風を追慕せしめざるはなし。予は少しく詩人が此處に居住せし來歴につきて物語る可し。

抑、此地方は、バッキンガム、シエヤーにして、敬虔なる信仰と、鞏實なる思想を有する人民の住所なり。チルターイン丘の南、ミスホーイン河の谷は、十五六世紀の頃、ローランド教徒が深き根據を据たる所にして、幾多の殉教者が、血を瀝ぎ、炎に焚かれ、英國憲法史上忘るべからざる人物の輩出したる舞臺也。後の蘇蘭の宗教改革者ジョン、ノックスも來りて説教せしとあり。又ジョン、ハンブデンの感化を受け、て進歩せるピューリタンも行はれたり。十七世紀クエーカー宗の創立者、ジョージ、フォックス此地方に來りて熱心なる歸向を得、多數の同朋集り來りて、クエーカー

徒の根據地となるに至れり而して此チャルフォントなる處に邸宅を有せる、アイサツク、ベニングトンは彼等の中心となり、詩人ミルトンの書記をなせし、トマス、エルウッド及び米國費府の基礎を置きたる、ウヰルヤムペン皆此地方に住して、幾多の迫害と幽囚とを蒙り、其質朴眞率なる一生を送りたる所なり。

エルウッドは初め倫敦に往きて、ミルトンに學びたりしが、後年倫敦に流行病猖獗を極めし時、ミルトンは之を避けむことを欲し、書をエルウッドに送りて、適當なる住家を周旋せんことを需めたり、其需めに應じたるもの、即ち此チャルフォント、セント、チャイルス村なるミルトンの隠れ家なり、盲詩人は妻子を携へて此に住居せり、一日エルウッドの訪ひたる時、詩人は一原稿を出し、小閑の餘之を讀むべき事を命じたり、是即ち失樂園なり、エルウッド一讀咏嘆して措かず、ミルトンに謂ふて曰く、既に樂園失落は在り、樂園回復に就きては如何とミルトン聽きて沈黙答をなさず、遂に再ひ筆を此小屋に取り、復樂園を草す、ミルトン倫敦に歸りたるの後稿成る、乃ちエルウッドに示して曰く、是卿がチャルフォント村に於ける注意の賜也と、予は偶然にも此のミルトンの隠れ家を訪ふを得、轉當年を

想像せずんはあらず、米人屢此小屋を購ひて米國に移さんと欲する切也、されど十五年前より之を保存する事となり、其處なきに至れりといふ。

予は車を驅りて行くと數町、畫の如き村落は綠なる草と白き花とを以て飾られたり、忽ちにして丘陵を下り、谷となり、前面眼界開きたり、左を顧みれば凹みたる平坦なる廣場あり、恰も樹園の老るたるが如し、唯鬱々たる菩提樹は其一隅に茂り、古き煉瓦の小屋は靜かに其間に立てり、密に茂れる森の間より聞こゆる野鳩の聲は、益々寂寥の感を増さしむ、處々の生牆はブルムローズの花にて滿され、樹林も灌木も青々として、櫻の園は雪の如く遠く連れり、此の如き景色は汽車にて、都へ急ぐ旅行者は逆も想像だも及ばざる所なり、此處はチヨルダンと稱して、即ちクエーカー教徒の集會所なり、番人に案内されて、會堂に入れば、粗造質素なる腰掛が規則正しく配列されたるのみにして、他に一の裝飾だもなし、壁は白く洗はれ、窓は格子細工にして、室の一端は少しく高く、プラットフォームとなれり、是れ實にウイルヤム、ペン常に其同朋を集會して、熱心質朴なる態度を以て、黙禱を捧げし處也、二階に二室あり、是婦人室に供せられたる者にして、窓の戸を排せ

ば、直に會堂に臨みたる高廊と變し得べき仕掛なり。會堂の後に馬厩ありて、大さ
 廿頭を容るべし、事あるに臨みて、高廊の窓戸を鎖して、婦人を擁護し、馬に跨りて
 難を防ぎたる見るが如し。一面平坦なる廣場は、綠草を以て蔽はれ、其間に十二個
 の形ばかりの小墳墓を認むべし。是れ、エルウッド、ウィルヤムベン其妻子の靜か
 に眠れるなり。平和を以て暗號として沈黙を以て主義とせるクエーカー徒に向て
 は洵に適切なる場所にして、世界廣しと雖何れの處か、より靜かなる處あらむや
 彼は二度米國ペンシルベニヤ州に航し、土地を開拓して、平和なる同教徒の世界
 を形作り、屢々種々の嫌疑を蒙り、殘酷なる拷問を受け、久しく禁錮の耻辱に遇
 へり。晩年痲痺に罹て、六年の久しき、其容貌猶同情親切の光を輝かしつゝ、此靜境
 に平和なる生涯を了せりといふ。米のフナラデルフヤは、即ペンの基礎を置し所、
 從來クエーカー市の名ある所以なり。後年米國獨立の時、各州の代表者集りて、自
 由の爲めに誓ひたるは實に此費府にあらずや。今や同市民は新らしき市廳を立
 て、世界第二の高塔を作り、上に安するにペン彫刻像を以てせり。而して其中に新
 たに盤を作りて、市民舉て此チホルダンの遺骸を移さむ事を請ふ。然れども此申

込は拒絶されて、彼は英國國民代表者の一人として、英國の土に休みつゝあるなり。
 たしかに英たるもの其精華の一として、以て誇るに足るべし。一日の郊外旅行、感
 慨頗る深かりき。今筆をとりて當時の肥臆を寫す所なり。

予英國の教界を視察し、彼か宗教改革已來、國立教會制をとり、千古儼然として
 變更せず、着々として之を經營しつゝあるを見て、其實際力に感服するもの也。而
 して予は之と同時に其已外の教徒の行爲に就きても亦大に意味の存するを認
 むるもの也。彼等は實に教會としては本國に成功せず、却て外國に遁るゝの止む
 を得ざるに至れり。ビュリリタンは米國ボストンに、クエーカーはフナラデルフヤ
 ヤに、メンヂストはバルチモアに、旺盛を極むるにあらずや。されど彼等は國立
 教會の空氣をして純潔ならしめ、血液を清淨ならしむる防腐劑となれり。是彼等
 が眞摯なるに在り、敬虔なるに在り、實行的なるに在り、熱誠火の如く、堅實石の如
 きに在り、前記の兩遺跡、猶其一端を示すにあらずや。是吾人が以て戒となすべき
 點也。前世紀に於ては此性質は宗教的社會事業の上にあらはれ、教會の内外を問
 はず、信仰の猛火を以て、社會を根本的に改善するの運動となれり。ゼネラルプー

スの救世軍ミリス伯の會長たる教會軍の如きは下層の社會に働き、ヂョーヂ、ウ
 井ルヤムの首唱にかゝる青年會の如き健全なる社會に向て世界的に成功せし
 ものとす。再び英國に遊び一言其宗教性質を紹介すること此の如し。

あ の 吉

天つ日をさして誓ひし唯一人の

友に別れて日へぬ月へぬ

「ゼルマン」の野邊のあらしのあらし夜は

「ローン」めしませ太りませ君

ちる花を眞袖にうけて諸共に

泣きしもかゝる臘夜なりき

マルチン、ルーテルの遺跡を訪ふ

チューリッゲンは獨逸聯邦中央部に位せる、一帯山間の地名を總括して名づ
 けたる名稱にして七個の大名小名の領地を包含せり、其人情風俗の如き實に質
 撲と武骨とを極めたる田舎山家にして、眞弊にして其修飾を施さざるの處に無
 限の味あり、獨逸人の標本として彼等の最も誇るに足るべき、マルチン、ルーテル
 が宗教改革の大偉業を成就し、回天の活劇を演じたるの舞臺は皆此チューリッ
 ゲンの中にある、彼が幼年の時、コツタ婦人の家に寓して、他の小供と共に讚美歌
 を誦ひつゝありしは、實にアイゼナハ市にして後年彼が一生に於ける中心とな
 れる事業、即バイブル翻譯を成し遂げたるのワルトブル城は實に指顧の間に横
 はれり、彼が修學時代はエルフルトに於てされたるものにして、非常なる憂鬱暗
 澹の苦悶に陥り、大學に於て其同輩と嬉戲談笑する能はずして、其父の悲哀と失
 望とを顧みるの隙なく、學を捨て、隱遁道を求めたるアウグスティネル修道院は
 今猶依然として存在し、古壁を蔽へる萬萬の趣、一しほ人をして懷古悽愴の情に

堪へざらしむるものあり。特に彼の憂鬱に沈みたるの古室、バイブルを發見し新光明を見出したる。當年の圖書館を見るに至りては、躊躇低徊去るに忍びざらしむる者あり。ウヰッテンベルは實に彼が宗教改革の燎原の大火を點せしの處。彼が九十五個條を掲けたる寺院、法王の破門狀を燒きたるの跡等、彼及びメランヒトン等が當年の遺跡一々徴すべき者あり。特に彼が晩年に至る迄、此所に住居して、常に其同人を集會して、バイブル翻譯の功を成功し、其妻子と共に單純清潔なる生活を送りたる彼が住居は依然として其舊態を改めず。其他エーナに於ける熊屋と名つくる旅館は、實にルーテルが一武士の衣服を粉して此に宿せるの夜、遠く瑞西地方よりウヰッテンベルに彼れを訪はんが爲めに旅行しつゝありし人々に遇ひ、其實名を語らずして別れたる所なり。又彼がウオームス國會よりの歸途、フリードリヒ賢侯其害あらむことを恐れて、其兵士を遣はして、道に彼を捕へたる所は山中、今に猶其跡を存せり。其捕はれてワルトブル城中にてエンケルゲと稱して武士の服裝をなし、バイブル翻譯の爲めに一年間幽居潜伏して、心血を瀉きたる當年の室は、一種言ふべからざる靈感を殘して萬里の孤客

をして全身無限の清光に浴せしめ、坐るに森嚴なる感想に堪へざらしむるものあり。之を要するに、宗教改革の大活劇は、實に此チユリンゲンの山中より響き渡れる武骨なる絶叫によりて醒されたるなり。今や親しく其地を踐み、其田舎の風俗の武骨なるを見、其山川の幽邃清澄なる風光に接して、坐るにルーテルが天眞爛漫の活動を追想せしめ、又彼が此の如き質實率直の性質を養成し得たる所以を感得することを得たり。彼は常に「予は百姓なり、百姓の息子なり」と云ふことを以て名譽となしたりといふ。此一言は如何にも趣味深くして、且つ彼が一生を始終したる真面目の氣風を言ひ盡したるものにして、彼が修飾なき人格は躍如として見るが如きものあり。

チユリンゲンは常に宗教改革の舞臺たるに止らざるなり、獨逸文學の精髓ゲーテ、シラが詩神の冥感を享くるの處、其山光水色彼が神韻に入りて、千古有聲の遺響を傳ふる所なり。兩詩聖が住居は今猶ワイマールに存在して、萬里の征人をして轉々當年の生活を追想せしむる者あり。エーナ亦シラの邸墟ありて、兩詩人が散歩したる庭園今猶存在し、老樹の下、石造椅子の畔、共に相語りたるの跡は

坐ろに其清らかなる交遊を慕はしむ。ライプチヒにアウエルバハの洞室あり。是古よりフアウストの口碑を其壁畫に描ける所。ゲーテ若年ライプチヒ大學に學べるの日、屢々此室に酌み、遂に彼が千古の傑作「フアウスト」を案出し、遂に其詩中の舞臺として之をも其中に入るゝに至りたるものなりといふ。予は此室に遊びたる時、彼の言ひしが如く、現に予か占むる所は千古の遺きにあるが如く、既に消ぬ失せたるものも勇躍として眼前に實現するが如き心地せり。特にイルメナウに遊びてゲーテが老年屢々此地を訪ひ其山水の間に呻吟したるの跡歴々として存在するを見て、趣味の津々たるを感じたり。キツケルハインと名くるはイルメナウを去る數哩なる幽邃なる山中、孤峯頂上に於けるゲーテが草廬を結びたる所なり。彼れは一夜、中霄萬籟寂たるの時、無限の感想に打たれつゝ、彼の有名なる「夜」の謠の數句を壁上に題したり。彼老境に及び、八十五歳の時最後の誕生日を其最も愛するのイルメナウに迎へむとて、其兒孫を伴ひて來り、一夜十年已前の番草廬を尋ね、往事を回想して感慨に堪へず、進みて其壁上の題詩を一瞥して、其結末を補ひたりといふ。其遺墨今猶保存して旅人の吟魂を動かすものあり。

此の如きの詩境、何れも此「チューリッゲン」の中にあり。實に「チューリッゲン」は獨逸の精粹の鐘る處、山靈磅礴凝りて偉大の宗教家を産出し、千古詩人を醸し出したるものと云ふべきか。

其他「ハルレ」は「フランクハウスの建設せられつゝあるの所」。「スベール」は「フランク」によりて唱導せられたる敬虔主義は深く人心の奥底に響き、心琴の絃線に觸れて、驟々たる同情同感の信仰は、實際的社會の救済となり、慈惠博愛の事業は、着々として施設せられ、遂に「フランク」慈愛なる精神は發して孤兒院、學校、傳道事業となり、大なる規模を以て其偉業を遺せるもの即ち是なり。今や之に加ふるに中學あり、女學校あり、廣大なる一大學校屋敷となれり。信仰の力亦偉大なるかな。エーナ大學に至りては古來有名なる學者の輩出したるの所。四方圍らすに山を以てし、峯高く、水清し、「ヘーゲル」を初めとして幾多の哲人をして靜觀感得せしめたるもの決して偶然にあらざるなり。若し夫れ「チューリッゲン」の特徴を數へ來らば、趣味いと深きを覺ゆ。

予が「チューリッゲン」に遊びたるは實に一昨年(三十三年)の秋九月、伯林を出立

する時はウンテル、デン、リンデン街の並木に秋風吹きて、菩提樹の梢はや染めたる初め、異郷の秋色殊更に物淋しく感ずる頃なりき。予と待山とは櫻堂法臺のエイナに遊學せらるゝを送り參らせむが爲めなりき。道にウヰツテマベルヒ及ハルレを訪ひ、エイナに至り。此に兩氏と袂を分ちて獨歩シワルトブルヒに入り、イルンナウに止り、チユーリンゲンの山中を彷徨し、遂にワルトブルヒを訪ひ、エルフルトを過ぎり、ライマールに滞在し、ライブチロを一瞥して歸れり。首を回らせば年所勿々既に一年伴の古の夢となりぬ。而して今や身は飄然として故國に歸來して、茲に又た年を迎ふ。而して教界の風物暗澹として、改新の曙光未だ認めべからず。月窓一夜舊史を繙きつゝ、曾遊を回想し、轉々感慨に堪へざるものあり。暗燈影裏、フアウストの冥想を學び、往を懐ひ、來を望みて、茲に聊か當年の記憶を呼び起して、所感を披瀝すと云爾。

拜啓、此度淨穢エーナに御留學に就き同行致し、當宿に泊し申候。是ルーテラルがケッスラリ、ロイナナ一兩人に遇ひたる宿に候。其室にて初の珈琲を飲みつゝ。

ツムシエヤルツヘム、スーレンにて……………常

ビスマルクも……………に泊したると有之候。三十四年十月三日……………榮

吉 觀

獨逸より

四曆一千九百二年二月四日早晩四時夢寐む。突然として父母の慈訓を回憶し、翻て一昨春已降四遊の経過を追憶し、感慨止むべからざるものあり。既にして感謝の念油然而として起り、横臥に堪へざるものあり。乃ち盥漱畢みて大經を拜讀す。且つ以爲、此の如き深遠微妙の念を起したることなし。今にして筆を探りて其感を描かずんば、亦何の時の其期ならん。而して時正に登校時間に迫る。乃ち校に登りて歸り、忽ち歸朝を促すの電報に接す。回顧せば米、英、佛、獨、澳、匈、和、蘭、白、耳、機、諸國の諸教を視察して、人事勿々の間、二星霜を経たり。今や思想圓熟して、益佳境に入るの時。此報に接す。因縁洵に不可思議也。四遊二歳、今獨都伯林を去りて、羅馬の舊都を一瞥し、將に東歸の途に上らんとするの(二月十一日夜)前夜、諸親友予を助けて行装を整へ、歸りし後、孤燈影下、俯仰感慨に堪へず。座側小照をとりて感を記し、教友諸兄に呈す。

獨乙帝國伯林市に於て

近 角 常 觀

附 錄 終

文學士 近角常觀著

信仰之余摠

文學士 清澤滿之著

我 信 念

文學博士 前田慧雲著

竹風香處讀

文學士 近角常觀著

佛弟子小傳

▲第四版發行

▲上製廿五錢 稅四錢

▲並製十五錢 稅二錢

▲四號カナヅキ

▲一冊五錢 稅二錢

▲十冊以上割引

▲寸珍美木

▲正價十錢 稅二錢

▲寸珍クローズ美木

▲上製廿五錢 稅四錢

▲(近刊)

明治三十七年二月十二日印刷
明治三十七年二月十五日發行

信仰問題與付
並製五十錢 稅八錢
上製六十五錢 稅十錢



著 作 者

近 角 常 觀

東京市本郷四丁目五番地

發 行 者

清 水 金 右 衛 門

東京市麴町區內幸町一丁目五番地

印 刷 者

多 田 三 彌

東京市麴町區內幸町一丁目五番地

印 刷 所

惠 愛 堂

發 行 所
賣 捌 所

東京本郷四丁目五番地
(電話下谷三〇三九番)

文 明 堂

興教書院 森江書店 東京堂 吉岡書店

福音社 川瀨代助 富貴堂 菊竹書店

文學士 近角常觀著

信仰之余摠

文學士 清澤滿之著

我 信 念

文學博士 前田慧雲著

竹風香處讀

文學士 近角常觀著

佛弟子小傳

▲第四版發行

▲上製廿五錢 稅四錢

▲並製十五錢 稅二錢

▲四號カナヅキ

▲一冊五錢 稅二錢

▲十冊以上 割引

▲寸珍美木

▲正價十錢 稅二錢

▲寸珍クロース美木

▲上製廿五錢 稅四錢

▲(近刊)

明治三十七年二月十二日印刷

明治三十七年二月十五日發行

版權所有

著 者 近 角 常 觀

東京市本郷四丁目五番地

發 行 者 清 水 金 右 衛 門

東京市麹町區內幸町一丁目五番地

印 刷 者 多 田 三 彌

東京市麹町區內幸町一丁目五番地

印 刷 所 惠 愛 堂

發 行 所

文 明 堂

賣 捌 所

東京本郷四丁目五番地
(電話下谷三〇二九番)

興教書院 森江書店 東京堂 吉岡書店
福音社 川瀨代助 富貴堂 菊竹書店

信仰問題與付
並製五十錢稅八錢
上製六十五錢稅十錢

29/2/38

著氏璋惠口濱

教宗の年青

版二第評好

容内の書本

- 第一章 宗教を信仰するの必要ありや
 - 第二章 宗教は如何に撰擇すべき歟
 - 第三章 圓滿なる宗教は存在する歟
 - 第四章 宗教は科學と衝突せざる歟
 - 第五章 靈魂は永久不滅の者なりや
 - 第六章 佛陀は眞に存在する者なりや
 - 第七章 吾人と佛陀とは如何なる關係ありや
 - 第八章 救濟の信仰は自重に害なき歟
 - 第九章 信仰は進取の氣を殺かざる歟
 - 第十章 宗教の信仰は如何なる利益ありや
- 以上の數章に分ちて巧に宗教の眞意義を説明したる者なり
(正價廿五錢 郵稅四錢)

堂明文 目丁四郷本京東 所行發

梵文學十二原書出版

第一編既成

今般梵書中必要の原書十二種、高楠兩博士の希望に原書を以て配各宗學校及圖書館等には一書を備へ、且つ梵語教科書として用ゐられんことを希望し、出版の原書は宗教哲學文學、その他に就き最も必要なるものを撰び、第一編として出版せしむ。

一梵語戯曲シヤクンタラ

特選カトリックの作にして、獨のゲーテ、ヘル、有名の脚本なり、ゲーテはその才力、等の人物に依りて歐洲に吹聴せられたる、自作の時、シヤクンタラに於て之を、天地間美の極と賞讃せり、獨逸ブルカルド版字を以て梵印刷致し候、洋裝刷版二百十二頁餘、原價金貳圓郵稅金拾貳錢

發行所

東京市本郷四丁目

文明

堂

27/12/07

著氏璋惠口濱

教宗の年青

版二第評好

容内の書本

- 第一章 宗教を信仰するの必要ありや
 - 第二章 宗教は如何に撰擇すべき歟
 - 第三章 圓滿なる宗教は存在する歟
 - 第四章 宗教は科學と衝突せざる歟
 - 第五章 靈魂は永久不滅の者なりや
 - 第六章 佛陀は眞に存在する者なりや
 - 第七章 吾人と佛陀とは如何なる關係ありや
 - 第八章 救濟の信仰は自重に害なき歟
 - 第九章 信仰は進取の氣を殺かざる歟
 - 第十章 宗教の信仰は如何なる利益ありや
- 如上の數章に分ちて巧に宗教の眞意義を説明したる者なり
(正價廿五錢 郵税四錢)

堂明文 日丁四郷本京東 所行發

梵文學十二原書出版

第一編既成

今般梵書中必要の原書十二種を撰び金版に依り出版致候。本書は南條高楠兩博士の希望に原價を以て配各宗學校及圖書館等には一本を備梵語教科書として用ゐられんこと出版の原書は宗教哲學文學、その他に就き最も簡易を希望致し候。申候可第一編として

一梵語戯曲シヤクンタラ

詩聖カリーダーサの作にして、獨のゲーテ、ヘル有名の脚本なり、ゲーテはそのデラ、等の人物に依りて歐洲に吹聴せられたる。自作の詩「シヤクンタラ」に於て之を天地間美の極と賞讃。獨逸ブルカルド版に於て之を洋裝刷版二百十二頁餘原價金貳圓郵税金拾貳錢。クロース紙刷印刷精撰。

發行所 東京市本郷四丁目 文 明 堂

文學博士南條文雄先生 共述
文學博士高楠順次郎先生

●●最新版九月四日發行

佛領印度支那

四六二倍大本美本
地圖寫真銅
版數十葉入
定價金九十錢
郵税金十錢

其言語、其風俗、其歴史、其地理、我國と關係深くして未だ我が讀書界
に一人の其國を紹介したるものなきを 佛蘭西領印度支那となす而し

て其これあるは本書に始まる、本書は二博士が親しく佛領印度支那に遊び、其五州則
ち東京、安南、交趾、東浦塞、老撾、を説明したるものなり、**地理學者史**

學者は素より、何人も**佛國日南の經營**を知らんとするものは一本
を座右に備へらるべし、

發兌元 東京本郷四丁目五 文明堂

文學士 清澤滿之先生著 三版

精神講話

定價三拾錢 郵税四錢 郵券代用二割増

精神一養に關する自己の經濟を講じたるもの
を集めて二冊子としたるを本書とす。

故に本書に向ひて高尚なる論議や、難澁なる
理談を望む者は恐らくは、何等の得る處な
からむ。

されど眞摯に自己の精神の修養に心かくる
者、又は熱心に内心の安住を求むる者、一度
本書を讀まば、其所得蓋し妙からざるべし。
ともかくも本書は著者か精神上に實行しつゝ、
あることを記したるものなるか故に、本書を
讀む者亦精神を以て讀むべきなり。

發行元 東京本郷區四丁目五番地 文明堂

清澤 滿之 多田 鼎合著 三版
佐々木月樵 曉鳥敏合著

精神主義

定價三拾錢 郵税四錢 郵券代用二割増

月なき夜の道を行く、旅人か望む北斗星。罪
に惱める弱者が胸に宿れる光明。

「精神主義」は苦みの谷をたどれる迷者が、慰
めの光明を認めたる歡喜の叫びなり。

「精神主義」は社會に苦み、自己に惱める人が、
導きの如來を信じたる安心の聲なり、

「精神主義」は宗教の記載なり、信仰の表白な
り、救済の發揮なり。

「精神主義」は事實の記載なり、經驗の懺悔な
り、我等の精神状態を有りの儘に表白したる
ものなり。

文學博士 前田慧雲師著 ◎好評噴々三版出來

版 菊三百三拾貳頁

大乘佛教史論

上製 郵税金十錢
定價金七十錢
郵税金十錢

本書は○大乘○佛教○の○源流○を○歴史的○に○論述○したる者にして、議論嶄新、考證該博なり。卷尾に◎大乘佛教考を附録とせり。佛教史を研究せんとする者は一讀、再讀すべし。大乘佛教論者も必ず讀むべし。大乘非佛説論者も亦必ず看るべし。佛教學校の教科書として尤も適當なり。

發兌元

東京本郷四丁目五番地

文 明

堂

賣捌所

森江書店 上田屋
光融館 東京堂

京都市 西六條 興教書院

同 顯道書院
法藏館

文學博士井上哲次郎先生著 好評噴々第十一版

釋迦牟尼傳

版 菊
頁 百 三

上製 郵税金八拾貳錢

並製 郵税金六拾錢

釋迦の史傳として、從來我國に行はるゝもの、其類の小説的、非ずんば、空想の的、學者の、一顧に値ひずる、博士に感ある、世界的、大偉人の相を知らぬ、正確の材料、殆ど稀なり、研究の結果、終に此篇となる、其内、此書の特徴が、爲め、正しく、討論する、評傳たる事、及び、孔子、基督、マホメット、等と併比較評論したる事、並に、佛教を學ぶもの、精細に、其材料、研究法とを示した、伏して識者の一覽を待つ。

發兌元

東京本郷四丁目五番地

文 明

堂

文學博士

井上哲次郎先生校閲

小野藤太先生著

九月上旬發刊

日本佛教哲學

△菊版三百頁餘

△定價金六十錢

△郵稅金十錢

稱して佛教といふ、その意一言にして盡きたるが如し、而宗は十二派は三
 も之を惟ふにたゞ日本に現存するもののみを以てするも、
 十三、經論八千餘卷疏釋殆ど數なし、これを探れば愈
 げば益々高く、その歸趣得て測り知るべからざらんとす、こゝに至て佛道に志あるも
 の途に亡羊の嘆を發せざるも、
 尤雜なる佛組織的を公にせらるゝに至れり、其文章の簡潔、勇健にして明
 透せる、其組織順序の秩然たる、此類の著述としては敢て絶後と謂はざるも蓋し全
 空前なり、苟しくも宗教、教育、哲學、倫理、等の研究に志ある者は必ずや一讀せざ
 るべからざる所のものなり、

發兌元

東京本郷四丁目

文

明

堂

左々木月樵先生新著

實驗の宗教

菊版美本三百頁餘

上製 定價金六拾錢

郵稅金拾錢

郵券代用一割増

人格感化は、人靈の活ける攝取也。著者自己心中の煩悶を脱し、大安住の地を得
 んとして焦慮する多年。時に傳教に行き、弘法に行き、源信に行き、妙愚に行き、道
 元に行き、法然に行き、自運に行き、親鸞に行き、蓮如に行き、白隱に行き、
 各々其異なれる人格の上に光れる宇宙の靈氣に接し、こゝに自己
 の信念なるものを得たり。宗教の確立を見るに至れり。

本書はアライールの『英雄論』に似たり。エマーソンの『代表的人物論』に似た
 り。而して本書は之に同じき。その胸せる趣は讀んで明瞭なり。
 要するに本書は著者が人格の感化を受けたる靈感の記載也。故に、
 崇高なる人格に接して信念を得、修養に資せんと欲する人は、是非
 とも一讀せざるべからざる書也。

發兌元

東京本郷四丁目五番地

文

明

堂

文學博士 松本文三郎先生著

最新版九月十五日發行

佛教史論 佛典結集 第一編

紙質特撰印刷鮮明
菊版二百八十頁餘
上製定價金八十錢
郵稅金十二錢
並製定價金六十錢
郵稅金八錢

本篇は最古の信賴すべき紀傳により佛典結集四回の顛末を詳叙し傍

ら後代の書が如何に之を紛亂せしめたるかを指摘し、併せて東西學者の妄

説を列舉論破し、從來曖昧模糊の裡に沒了せられたる佛教史上の一大事實をして一

見明晰ならしめ學者をして眞實立るに之を辨せしむ。附録には彼の最近最

要の印度史料たる阿育王碑文の一切を翻譯し、錫蘭島佛教傳

來の状態を記述し、古代印度王統年代を比較對照したる等、皆是佛

教學者並に東洋史家の座右に缺くべからざる珍書なり。

發兌元 東京本郷四丁目 文明堂

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しくして、益々信仰の必要を感じ。一般に道義の制裁弛み去りて、人皆嚴格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を握らむとして胸中幾多の苦悶を抱き、社會實務の人にして、志操清淨なるものは、其理想を實現せむが爲に、人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼信仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志此の如く切實なるは未だ嘗て見ざる所也。

昨年已來、聊か此の時運の必要に應せむとする微志より、先輩の企てられし跡を引き續きて、一方には求道學會を設け、此等の道を求むるの人々の寄宿に充て、寢食を同じくして共に實踐躬行に勉め、又一方には日曜講演を開きて眞面目なる人々と共に心を潜めて信仰の問題を講し、互に心靈の修養に従ひしが、幸に佛陀の冥祐と、師友の同情とによりて期する所空しからず。學舎は常に滿員にして幾多の申込に負き、假會場に充てたる居間は狹隘を訴へて求道の人々を容るゝの餘地なし。此に於てや止むなく、懇切なる道友の勸告に従ひ、學舎を擴張し、會館を設立して以て焦眉の急に充てむと欲す。幸に篤厚なる先輩の指導に従ひ、忠實なる親友の贊助を仰ぎ、着實なる實行によりて漸次其結果を挙げむことは實に不肖の至願也。

從來首都に於て佛教徒に屬する會館の設なく、其不便を感ずる事一日の事にあらず。而して屢々計畫せられて、未だ容易に實行の緒につかざる所以のものは、蓋し其規模大にして完全を期すればなり、故に先づ現時の必要に應ずべき適宜の會館を設立して、漸次其大なるものに進まむことを欲す。是先づ本會館の建設を企圖して佛教者一般の需要に充て且つ清潔なる社交の中心に供せむと欲する所也。予西遊の際、泰西青年會の組織及會館の設備等を初めとして、幾多の社會的施設を詳細に調査し來りて、此等の事業の我國佛教者の手に成らむ事を望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを得ば幸之に過ぐるなし。冀くは四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ、協力贊助し玉はらむことを謹て白す。

明治三十六年十月 發企者 近角常觀

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しくして、益々信仰の必要を感じ。一般に道義の制裁弛み去りて、人皆嚴格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を握まむと爲して胸中幾多の苦悶を抱き、社會實務の人にして、志操清浄なるものは、其理想を實現せむが爲に、人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼信仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志此の如く切實なるは未だ嘗て見ざる所也。

昨年已來、聊か此の時運の必要に應せむとする微志より、先輩の企てられし跡を引き繼ぎて、一方には求道學舎を設け、此等の道を求むるの人々の寄宿に充て、寢食を同じくして共に實踐躬行に勉め、又一方には日曜講演を開きて眞面目なる人々と共に心を潜めて信仰の問題を講し、互に心靈の修養に従ひしが、幸に佛陀の冥祐と、師友の同情とによりて期する所空しからず。學舎は常に滿員にして幾多の申込に負き、假會場に充てたる居間は狹隘を訴へて求道の人々を容るゝの餘地なし。此に於てや止むなく、懇切なる道友の勧告に従ひ、學舎を擴張し、會館を設立して以て焦眉の急に充てむと欲す。幸に篤厚なる先輩の指導に従ひ、忠實なる親友の贊助を仰ぎ、着實なる實行によりて漸次其結果を挙げむこと、是實に不肖の至願也。

從來首都に於て佛教徒に屬する會館の設なく、其不便を感ずる事一日の事にあらず。而して屢々計畫せられて、未だ容易に實行の緒につかざる所以のものは、蓋し其規模大にして完全を期すればなり、故に先づ現時の必要に應すべき適宜の會館を設立して、漸次其大なるものに進まむことを欲す。是先づ本會館の建設を企圖して佛教者一般の需要に充て且つ清潔なる社交の中心に供せむと欲する所也。予西遊の際、泰西青年會の組織及會館の設備等を初めとして、幾多の社會的施設を詳細に調査し來りて、此等の事業の我國佛教者の手に成らむ事を望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを得は幸之に過ぐるなし。冀くは四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ、協力贊助し玉はらむことを謹て白す。

明治三十六年十月 發金者 近角常觀

文庫博士 松本文三郎先生著

最新版九月十五日發行

佛教史論 佛典結集

紙質特撰印刷鮮明
 初版二百八十頁餘
 上製定價金八十錢
 郵稅金十二錢
 並製定價金六十錢
 郵稅金八錢

最古の佛典... 佛典結集四回の順末を詳叙し佛

東西學者の妄

附録には彼の最近最

阿育王碑文の一切を翻譯し、錫蘭島佛教傳

印度王統年代 比較對照したる等、實は佛

珍書なり。

發兌元 東京本邦四百目 文明堂

贊助員

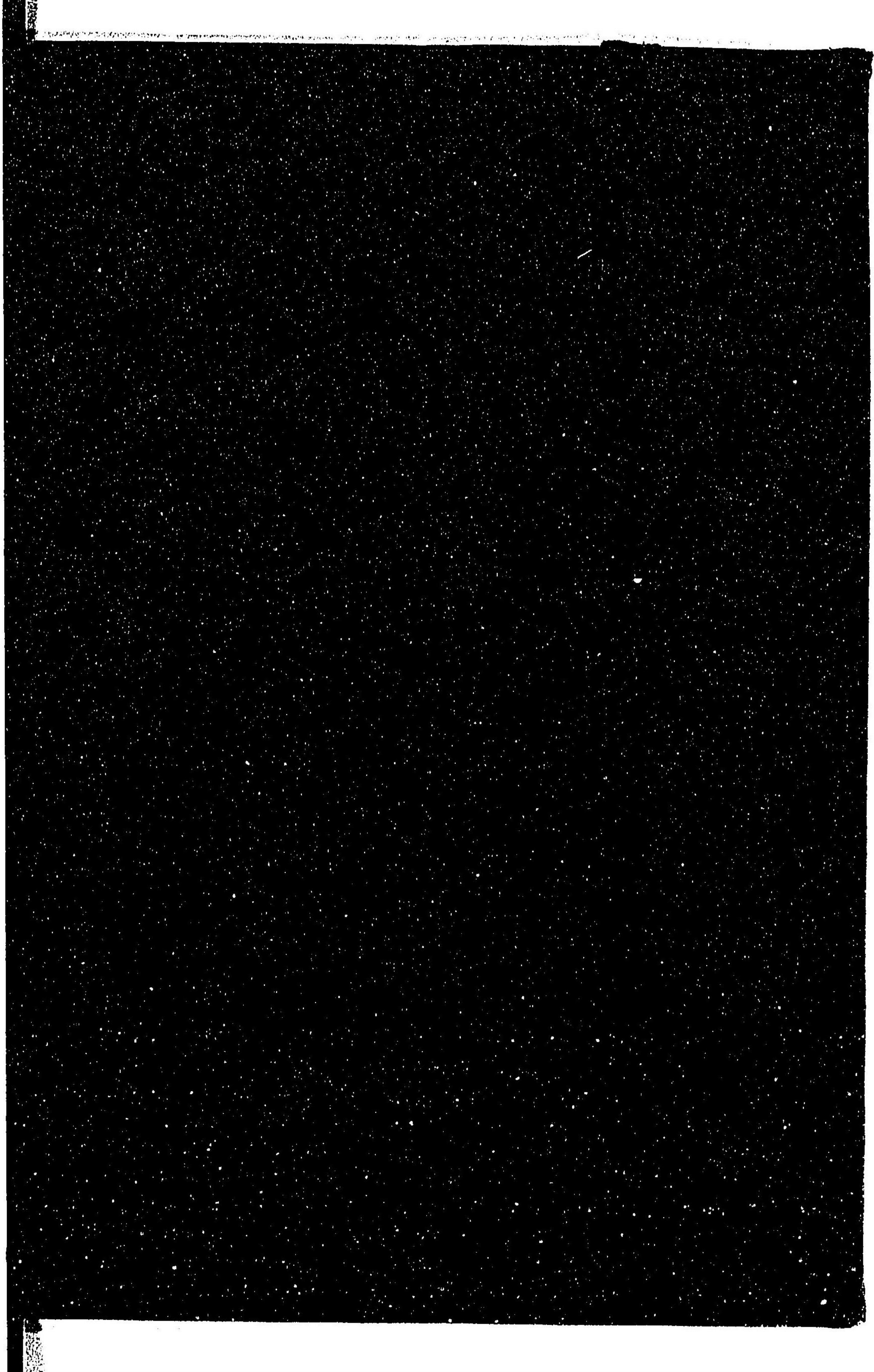
(いろは順)

文學士	朝永三十郎	文學士	北條時敬	文學士	今川照八
文學士	四澤善七	文學士	板橋盛俊	文學士	今井喜八
文學士	石川成幸丸	文學士	池山榮吉	文學士	本多辰次郎
文學士	稻葉昌丸	文學士	常盤大定	文學士	大内奇樹
文學士	大草三郎	文學士	小川滋次郎	文學士	萩野仲三郎
文學士	岡田治衛武	文學士	和田賢龍	文學士	片山國致
文學士	岡田治衛武	文學士	吉田賢龍	文學士	吉田靜致
文學士	柏原文太郎	文學士	月見了	文學士	南條文雄
文學士	高楠順次郎	文學士	村上麻精	文學士	上杉文秀
文學士	寶山真雄	文學士	野田藤馬	文學士	久我通久
文學士	梅原真	文學士	松本文三郎	文學士	真岡滿海
文學士	前田隆雲	文學士	藤島了釋	文學士	藤井健治郎
文學士	丸井圭治郎	文學士	安達靈忠	文學士	秋野孝道
文學士	柿崎正治	文學士	齊藤唯信	文學士	佐竹觀海
文學士	淨柳政太郎	文學士	境野哲	文學士	櫻井源健
文學士	酒生隱眼	文學士	白鳥康吉	文學士	島地默雷
文學士	三好愛吉	文學士	新保德壽	文學士	杉村廣太郎
文學士	島田番根	文學士		文學士	

注意

一、喜捨金爲警振局は本郷藤川町郵便貯金爲警取扱所宛者くは第一銀行宛御取組分奉願候
 一、爲警受取人宛名は東京本郷區藤川町一番地求道學會近角常親宛にて御送附奉願候
 一、喜捨金御送附後下候節は直ちに發起人より受取出し月々求道紙上に於て報告可仕候
 一、喜捨金は直ちに第一銀行に預け込可中候

45
-
297



45
297

(M)

013670-000-2

45-297

信仰問題

近角 常觀/著

M37

ABA-0140



